

直に相成候に付而は楮紙之義も下落可仕義は何れも相察居申折柄百姓共御扶助厚被思召昨年通御調上被仰付候而已ならず下々取扱之成行迄も御汲分被爲遊御不旋御場合大數御元入をも被仰付候段役人共は不及申上百姓共渡世之廣く營み易罷成候段誠以冥加至極難有仕合奉存候將又楮御渡被仰付候は、村切役人共紙漉人共連判受取手形指上置出來紙を以速に返上皆濟可奉仕候萬一村内如何様之義出來仕候とも返納方之義に付毛頭御願等申上間敷候並古來之御法向は素々此度之御趣意に付御取究等心違無御座候様兼て役人共々取示夫々堅相守可申候右様申上置後日御究向取崩不正相仕成候者御座候へは如何様御答被仰付候ても迷惑と申上間敷候依而連判を以御請申上所相違無御座候 以上

天保十亥年十二月

那賀郡木頭村吳頭庄屋

湯淺重次郎

同村五人組 嘉藏

同 吉之丞

紙漉人 伊勢太郎

(外二十名略)

紙方御代官所様御手代

小出庄介殿  
 吉本銀兵衛殿  
 齋城伊八郎殿

楮出來高積書差上覺

(那賀郡湯淺高太郎氏所藏)

一楮八貫	木頭村	嘉	一楮三貫	木頭村	伊勢太郎
一同壹貫		字太	一同貳貫		八太郎
一同七貫		茂兵衛	一同壹貫		若十郎
一同壹貫		繁藏	一同貳貫		佐太郎
一同五貫		淺吉	一同壹貫		音助
一同四貫		留次	一同五貫		森藏
一同貳貫		岩藏	一同壹貫		品之助
一同貳貫		直次	一同壹貫		種四郎
一同壹貫		勘兵衛	一同貳貫		安太郎

一同 壹貫 傳 吉 一同 壹貫 三 藏  
一同 壹貫 兵 兵 衛 一同 貳貫 八 十 次

合五拾四貫

右は紙漉人共手作楮之分

外に九拾貫程

右は外楮作人共之分

貳合百四拾四貫

右は漉人共手作楮並其れ共とも大綱積を以員數申出候様被仰付に付當年出來楮高相積書付に取約奉指上候 以上

天保十一年十一月廿七日

木頭村五人組

嘉

藏

齋城 伊 八 郎 殿

楮相對賣買に付願上覺

奉 願 上 覺

(那賀郡 湯淺高太郎氏所藏)

去る亥年新口出來楮を御趣法を以壹束に御調上に相成紙漉人共へ拜借被仰付出來紙代を以楮代御

取立被遊御趣意雖有仕合に奉存候然所極山分之義故山島打故山坂相隔居住之村柄故方々楮取寄賃銀其れ諸雜費彼是迷惑之筋御座候に付不得止事先達而右之段御款申上候御事に候就ては仰を御蒙り先頃は爲御聞札御苦勞被遣右彼是に付御上被爲御深慮盡御慈悲を以楮作人紙漉人相對賣買之義勝手次第九相調候上は楮貫高並名面共双方村役人共へ可致案内様御々條御書附を以今度御觸拜上奉畏候右に付ては紙漉人共早々紙相調度罷在乍去楮調通無之ては不相成様之運にも此度佐藤惣右衛門殿を被仰聞に付阿井村岩佐廣太殿へ願出右調通片時も世話成候様申聞候へ共先達而漉人共願之義廣太殿へ相障り可申哉然に於ては通之義早々出來成候様世話にも相至申間敷哉壹統疑念を生し何分にも其御元先達而御出張之手續を以御頼申吳れ候様遮而申出候に付御頼筋違様相心得候へとも右懸り無據御願申上儀に御座候此段御聞届被下楮調通早々出來成候様御運被遣人別に御渡被下候へは私共迄重々忝仕合に奉存候依而右之段書付を以御頼之儀御願申上候 以上

天保十二年十一月

那賀郡拜宮村肝煎

淺岡 助右衛門

同村五人組

弁 次 郎

坂州村五人組

太郎右衛門

木頭村五人組

吉之丞  
賀藏

小口村肝煎

近藤壽三郎

澤谷村庄屋

齋城多賀次

懸盤村當時兼帶木頭村組頭庄屋

湯淺重次郎

名西郡神領村組頭庄屋

岸 新右衛門 殿

仁宇谷産物仕成御取究並請書

(那賀郡 湯淺高太郎氏所藏)

仕上御請書之覺

一仁宇谷産物仕成元入銀拜借被仰付賣捌方趣法相立植原權兵衛湯淺重次郎田淵彌十郎元取申付於天神原取行居申所山分之者共多人數之中には端々不弁之者有之右者共賣事に仕候様心得違之者も有之趣に相聞へ別而如何之事に候根元右趣法之義は山分一牧百姓御救大場之御銀御渡に相成御手行同様裁判人等をも申附一と手引請にて取行被仰付有之義に候條右旨趣篤と相弁へ難有相心得産物仕成積下賣捌等之義右元取之者共申聞候取究筋相守不心得之義無之様村役人共仕

成人稼人に至迄懇に可申論候

一前段之懸にて御取行之義に候へは元入銀借請仕成仕候者共は積下之諸品都て天神原引請所へ相着可申所不心得之者共外方へ令援賣岩脇持井へ積下市中賣地賣之品は多分隨意に代銀取歸元入銀返納方等閑に仕成候者も有之趣別て如何之事に候就ては此度上大野村久留め田傍示におゐて出張所相建山分裁判人共相出張諸産物川之砌都て右場所へ着船仕らせ引合之上天神原へ積下させ地賣之分も岩脇持井大京原都合宜先々へ爲賣拂候様裁判仕取縮申度旨申出之通承届候條右様相心得不心得之義無之様仕成人稼人舟乗之者共へ厚可申渡候  
一元取手元銀子借請不申自分元入を以産物相仕成候者は其分迄賣事可仕所元取共元入銀指遣爲相仕成候産物於山分買取自分元入を以相仕成候姿に仕積下賣事仕候者も有之天神原へ積下之荷物相減候由相聞へ別而如何之事に候向後右様不筋之賣買不仕様仕成人共へ可申渡候  
一高瀬舟乗之儀自分買取積人候義は指留運賃積迄仕候様先達而相觸有之所兎角不心得之者共は買積いたし被是取行に指障候趣別而如何之事に候向後右様之義屹と指留運賃積迄仕候様舟乗之者共へ可申渡候

右之通取究候上にも不心得之者有之におゐては無手當咎申付儀に候條組下逸々不相洩様村役人共

を重々厚申渡させ當月中請書取揃可指出候且此觸狀急々相廻當月廿日迄に可指戻候尤其方組村々之内とても懸合無之村々は相觸候に不相及候 以上

三月七日

高木真藏  
原與右衛門

右は仁宇谷産物仕成御取究御觸之趣夫々御申諭被爲仰渡私共壹統に恐入難有勘腹奉仕罷在居申候此已後不心得之仕成仕如何様御咎被仰付候而も迷惑と申上間敷候依而私共連判御請書を以申上る所相違無御座候 以上

天保十一年四月 日

木頭村夫役御免人

宇太郎

(外五十名略之)

組頭庄屋

湯淺重次郎殿

惟葺拔荷制道觸書

(那賀郡湯淺高太郎氏所藏  
諸事覺書中抄出)

一御國産椎茸御林目附山元改送り手形無之抜荷物山分並在々にかゝりて取扱拔々令賣買候族も有之

勿論不筋之抜物に候得は御益をも相掠候事故向後林方右制道下裁判役之者時々打廻り申付不筋之荷物等取扱見谷候節當時惡意を以預置有之候坏と申立候ても山元改御林目付送り手形無之荷物並送り手形に不引合候荷物等於有之には早速取上若し及異議に候得は召捕所役人へ預置於役所嚴敷咎申付候條不心得之族無之様組下村々何者によらす小百姓に至迄屹と申付候様文政十二丑正月廿九日御觸書加茂西納木三組へ被仰付候に付右請書二月十日指上る尤右請書組下壹紙に取約右日限に飛脚出府

諸産物取究方之取定書

(那賀郡湯淺高太郎氏所藏)

定

一村々荷物持出之義は其口之請持小寄之手元へ相限相渡候事高瀬舟乗のもの諸品買取積下候儀嚴敷御指留被仰付候に付請持小寄之外他村之者入込諸品買取候義同様御指留之事  
一積下手形之義は其品々小寄のもの元村役人手形を取舟頭へ相渡候事並積入荷物  
一小川原口湯淺重次郎出張に付積入荷物小寄又は荷宿のもの諸品員數申出通付いたし送手形引合相渡候事

一仁字口植原又三郎出張に付諸事前全斷

一久留り田裁判交代出張に付積下高瀬舟筏乗下とも都而右場所へ相付賣拂方指圖諸諸拂に通に所々賣場請取書付歸船之砌爲指出候事

右之通九月五日中午出會之節湯淺重次郎田淵彌十郎植原又三郎申談相極候 以上  
諸産物小寄所人別名面  
和食町 兵左衛門

(外五十六名畧之)

裁判人請持村々左之通

- 湯淺重次郎請持
- 水崎村 古屋村 櫻谷村 白ヶ谷村 小濱村 其余山分不殘
- 義左衛門請持
- 音谷村 花瀬村 日浦村 朴野村 請の谷村
- 若左衛門請持
- 陰谷村 横石村 鎌瀬村 銚村 雄村 舞ヶ谷村 築上村
- 安兵衛請持

大久保村 入野村 牛輪村

豐藏請持

吉野村 延野村 鮎川村 朝生村

勘田信藏請持

百合村 小仁字村 土佐町 和食町 和食村 百合谷村

加藤光平請持

仁字村 阿井村 谷内村 榎谷村 馬路村

岡之助請持

西納村 内山村 相名村 竹ヶ谷村 井の谷村 平野村

右之通裁判請持村今度組替相居申候 以上

天保十一子年九月八日

天神原引請所左之通

一天神原引請所々荷物諸國賣仕切銀沖船歸帆次第荷積帳へ目安書入早々久留り田へ相送右出張所にて夫々寫置山分荷主共へ仕切狀相送候事

一同前金銀請拂出淵彌十郎出張にて請拂仕候事

一同所にて引請裁判人山方送荷物着帳付算用方壹人にて相勤させ日々勘定にて壹ヶ月限相都候事

一同所着荷物請取並沖船積入壹人に相限請拂仕らせ勘定方前同斷

一同所にて産物仕切算用方荷主共出張之砌時々仕遣候事

久留め田心得向左之通

一茶市中送取分持井へ爲揚道賣之義は益銀壹俵に付四分宛取立候事其余品々道賣之分益銀取立候事尤大京原岩脇兩所之義は不筋之賣事いたし候に付當時御指留被仰付に付元取方指圖有之迄は指留候事

一市中市問屋市日之義は花屋久米藏出張之上市いたし代銀都之義は増屋兵吉大久保屋岩藏兩人に取都させ可申事市帳久米藏久留め田へ持歸り寫仕天神原並に山分へ早々相送候事尤定居手代壹人指置候事

一炭材木筏板小仕成其余諸品之積船相改通付仕指圖仕候事

一灰屋行炭所之小寄人割賦いたし送らせ候事

右之通仁宇村孝次宅にて元取並裁判之者立會之上相定者也

子九月八日

産物仕成元入銀行着申上書

元三貫七百七拾貳匁壹分四厘之内

一壹貫百三拾壹匁七分 三步通

丑七月三步返上之内上納

内百八拾八匁六分

殘而九百四拾三匁壹分 不足

右は産物仕成元入御銀負數之通拜借奉仕居候所拜借高之内三步通返上仕候様被仰付奉畏候右に付前顯之通少々内上納仕三步不足之儀は天神原へ送込御座候茶三百俵並山筏里筏貳艘右品々仕切殘銀を以上納仕度右殘銀御渡可被仰付哉又は御指繼にも被仰付候得は難有仕合に奉存候右之段重々奉願上候義に御座候御行着に付申上る所相違無御座候 以上

天保十四年

卯三月廿九日

古屋村 徳兵衛 印

(那賀郡 湯淺高太郎氏所藏)

借用銀年賦上納に付申付覺書

(那賀郡 湯淺高太郎氏所藏)

其方與村之内仁宇谷産物仕成元入銀拜借年賦上納取立申付有之村々何分返上延引成候儀は取都方  
手緩く候所之事と差見候既森哲藏へも同様申付有之村々之儀は夫々取立返上成居候所其方取立  
方等閑に相成候而は哲藏組村へ相響忽取立支に相成別而如何之事に候條此段相心得此狀着次第吃  
と取都返上可相運候 以上

七月二十九日

谷 邦之進

木頭村與頭庄屋

森 永太郎

湯淺堅太郎とのへ

御年貢茶上納願上覺書

(海部郡 岡田丞太郎氏所藏)

乍恐奉願上覺

海部郡木頭上下山御年貢茶之儀古來々茶に而上納仕來り茶壹斤に付米壹升宛御繼被仰付難有上納

仕居申候然所昨丑年御年貢茶性合惡敷御座候旨に而御賣拂之節望人等無御座候旨に而無御座候趣  
被爲仰付此後右様龜抹之茶相納候而は御不爲に御座候に付茶繼米之儀は難被仰付御趣意且代銀願  
出候得は相應之直段に候得は被仰付候御趣等彼是被仰付孰も同様相約め申出候様先達而被仰付夫  
々奉畏候然所代銀上納被仰付候而は夫役銀上納時節に候得は一所に相成候ては遠山之儀にて地盤  
銀詰之土地柄に候得は困窮之百姓甚迷惑奉仕義に御座候並已前々右様米繼に被仰付御座候義故只  
今米繼に被召上茶上納御指止め被仰付候ては至極迷惑奉仕候木頭上下山之儀は稻作聊之義にて漸  
雜穀等作仕産物之茶を上納仕彼是之運を以續百姓役相勤居申儀に御座候右之仕合に御座候得は何  
卒是迄之通茶を以上納被仰付候得は至極難有奉存候然共昨年不調へにて畢竟望人も無御座候御趣  
至極奉恐入候不輕上納物候得は此後は私共随分力を盡し成丈は宜敷茶相撰持下け道筋坏にて雨露  
等に當り不申様心を附並川長筋等坏にても濡不申様心を附旅宿におゐても龜抹聊無御座候様仕時  
々役人共付添裁判仕聊龜抹無御座候様仕可申候尤直段高下之義は年々差別御座候得は是は仕様無  
御座候得共茶調之義は前段之通重々念を入随分宜き茶相撰持ち下少しも龜抹無御座候可仕候何卒右  
懸を以是迄之通茶上納に被仰付被下候得は難有仕合に奉存候萬一右様申上置又々龜抹之儀御座候  
得は其節如何様被仰付候而も申上様無御座候依而右之段書附を以奉願上候 以上

本

西宇山百姓惣代

利右衛門

傳兵衛

圓藏

與市

彌右衛門

伊之次

幸吉

鐵五郎

與次郎

伊勢次

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

西宇村庄屋  
武右衛門殿

材木挽座御下札覺書

覺

(那賀郡  
湯淺高太郎氏所藏)

一長川筋横石村の上大野村迄沈木川長に而挽小成仕高瀬舟にて積下申節上大野御分一所にて沈木積下申分は有來御口米代指上外に無木印爲代舟壹艘に付銀五分宛中島浦御分一所へ可指上候尤川口積出候節は有來御口指上管沈木挽小成仕節は手寄之川長目附ともへ案内仕指圖請挽小成可仕候

一諸材木挽賣座去申十一月來る午十月迄九拾ヶ年之間木頭上下山村々山師賣人受所に被下置候に付下裁判富岡町分善兵衛甚兵衛牛太郎徳兵衛伊兵衛伊右衛門中島浦分彌三八源藏平藏七太郎茂三右衛門久次郎都合拾貳人に任せ惣裁判人として右拾貳人之者共諸木勝手次第に相調御分一所へ相斷丸木にて御木印受向又手寄川長目付共之内へ遂案内改請候上にて挽小成仕挽木粉之儀は百枚詰にして木口裁判人木印入夫々揚書相添可申候

一右裁判人共之外人共儀は不及申賣人雖爲仲間挽賣仕者有之候は、吟味仕注進可申候右家道具等に相紛賣不申様制道可仕候

一右挽木賣場之儀長川筋北之方は櫛淵村立江村赤石を限川長村々へ賣木可仕候諸事川長御制道方之儀御材木目附中島黒津地御分一所之面々指圖受諸事猥無之様相動可申候勿論下裁判人之内不所存之者於有之は早速注進可仕候登儀之上挽座取上申答



右は富岡町中島浦にて諸材木挽座之儀木頭賣人共依頼被仰付候條御制道ベリ方之儀川長目付とも御分一所へ案内申出指圖受可申夫々山師共可申付候且裁判人とも木印形急々指出候様に可申付候

以上

西三月七日

加左平八  
速水春助

木頭村庄屋

長右衛門方へ  
彌三次方へ  
馬之丞方へ

諸紙援賣制道御觸

(那賀郡 湯淺高太郎氏所藏)

一御國出來之諸紙並諸他國又は於御國援賣買仕儀向後堅く御停止被仰付候條在々庄屋五人組共其村切に相改可申候若忍右商賣仕者有之候へは押置注進可申出候右之者吟味之上其科被仰付次に其所之役人共可爲越度旨實永三戌年御觸有之所近年甚猥に相聞へ候に付尙又此度相觸候條急度相きまり不筋無之様役人共可令裁判候不依何者に援紙楮見付次第押へ置其所之役人立合役人共

方早速注進可申出候其上押へ候者へは有來御褒美被遺儀に候條此段之義末々之者共迄申聞可置候且又役人共不究に付援紙等於有之は急度越度可申付間無手援御制道可仕候

一近年御帳楮御定之貫數上納不仕相滯之者有之段甚不埒之事に候急度上納仕候様可申付候楮繼仕候へは生し物之義に候へは是迄御帳に付有之候楮貫數減少は不被仰付候條隨分楮繼御帳付相育可申候尤楮増楮如何程出來候ても増楮之義は御帳付には不被仰付候間右之趣楮持人共へ夫々申聞楮増繁昌仕候様所役人共無間斷可令裁判候

右紙楮之儀甚猥に相聞候に付尙又屹と相きまり候様御當職相窺候所相觸候様被仰付候條此段組村々夫々相觸承知印加へ相濟次第可指戻候 以上

成 二 月

眞 殿 新 五  
増 田 半 兵 衛

薪炭問屋引受申上覺

(那賀郡 湯淺高太郎氏所藏)

仁宇谷筋産物炭薪之儀近年中島浦問屋共困窮仕賣捌指支谷筋之者とも迷惑仕に付此度板野郡奥野村松兵衛へ引受所奉願上に付右松兵衛並龜五郎兩人取行方申談之運左に奉申上候

一松兵衛龜五郎義上方表並市中表両所賣捌問屋壹軒宛懸組山分々積下荷物何ヶ程相湊候而も爲替銀之儀は山分々申出之時々少しも無指支指出並山分百姓とも諸上納之節出水旱水等にて荷物積下ヶ難出來節は仕立之炭薪村役人共相改之上書附荷物村役人預手形に其手組頭庄屋奥印仕相渡候得は引受所々爲替銀無指支指出候様申合御座候

一是迄中島浦問屋共々山分へ相渡候金相場過分之相場立に而相渡來候へとも此度引受所之儀は金相場市中相場を以相渡候様相究り御座候

一口鏡床科之儀は地盤中島問屋共取扱之通炭壹石に付八厘宛薪賣捌口錢壹艘に付三分宛之割合に仕儀に御座候

一撰炭壹俵に付懸目六貫柴口壹俵に付懸目七貫目薪壹把に付懸目四貫目に相仕立目方不同無之様取究申義に御座候

一高瀬舟之儀は自分買入積込之儀は指留運賃迄に相究積入荷物山元々俵數目方柴員數並印等夫々委敷通に相記村役人々指出候舟送手形右通に引合相認め中島御分一所へ指出申に付引受所々時々荷物受取小切相渡候様相究高瀬舟船頭共不筋有之候得は其段奉申上已後右船におゐては荷物積入御指留奉願上候筈に申合御座候

一此度引受所之儀は仁宇谷筋諸産物爲引立御願申上候運に付右引受所之主方不筋之仕成御座候時は御指替奉願上に付其節違背無御座段申合御座候

右之通松兵衛龜五郎申談之運豫書付を以奉申上候 以上

九月二十四日

西納村與頭庄屋

植原權太兵衛

木頭村與頭庄屋

湯淺重次郎

石塚村與頭庄屋

田淵彌十郎

小出 滿右衛門 殿

炭薪引請場所聞届書

(那賀郡 湯淺高太郎氏所藏)

此度依頼に申付候炭薪其餘諸産物板野郡山田松兵衛引受場所之儀天神原へ相居度旨田淵紋十郎申出候に付申出之通承届則中島浦御分一所へも申達候條可其意得候 以上

未十月晦日

二三三四

原 與右衛門  
三 間 勝 藏

西納木頭

與頭庄屋共方へ

仁宇谷筋炭薪其產物引受所右之通被仰付候條右様に可被相心得候此書狀急々順達濟村を可被指  
戻候 以上

十一月六日

湯淺重次郎

拜宮 東尾 菖蒲 檜曾根 長安 臼ヶ谷 小濱 櫻谷 音谷

右村々

肝煎五人與中

### 運輸交通

海道筋上下取調申付覺書

(侯爵 鮮須賀家所藏  
御代々様御書寫中抄出)

覺

内々如申聞候淡州海道筋上下輩狼藉族無之様に如此制札遣置候並兩郡之百姓等不寄男女無左右他所他國へ不可出候萬一用所有之而於罷出者其所之庄屋政所儘申理彼者共切手を取其切手伊藤濟兵衛裏判にて其を持出入可致候將又來年淡州人足相立手筈に候何時も平瀬伊右衛門福田甚九郎切手次第無油斷可申付候然に右用所申遣條書狀ども見分可相届候何も不可有油斷者也

はうあん

十一月三日

宗 一 (御印)

山内彌五大夫どのへ  
生田市左衛門どのへ

長善寺宿泊定書

定

(三好郡  
木彦一氏所藏)

驛路山長善寺

二三三五

一當寺之儀往還旅人爲一宿令建立候之條專慈悲可爲肝要或邊路之輩或不寄出家侍百姓行暮一宿於相望は可有似相之馳走事

一不寄自國他國者山賊盜賊等之道其外諸惡之企有之輩時々來宿をかる族可有之候勿論兼而事之由被令承知者か不然は不審に被存族有之は宿之儀達而可被遂斟酌萬一押而一宿可仕由申者有之は偏可爲狼藉則地下之勝屋政所告知可被行曲言事

一地下人並他處他郷之者當寺へ相集或國之褒貶或對代官給人企訴訟以下其外諸之惡事を相工族其面々は不及沙汰宿等隣家迄可爲曲事

如是族於相懼者勿論不可能許容事

右定置處常住被守此旨不可有油斷之狀如件

慶長三戌年六月十二日

峰須賀阿波守

茂

成様

(御墨判)

驛路山長善寺

當寺爲勸忍分

以寺廻拾石令附

今切御關所手判ニ關スル文書

(麻植郡工藤實一氏所藏)

貴札致拜見候貴様御召仕之女並下女此度江戸表江被差越候條今切御關所手判差違可申候委細之儀當地被差置候御家來西尾源右衛門に申聞候而御紙面之趣致承知候則相調源右衛門へ相渡申候恐惶謹言

酒井若狹守

忠義花押

五月十四日

松平阿波守様

御報

二二二七

白地渡御番所札

(徳島市森川宗秋氏所藏)



與畢全可有所  
務之狀如件

慶長三六月十二日

右之通御判物寫指出申處相違無御座候

以上

茂 成 様 (有御判)

賀 茂 村

三 木 政 十 郎 殿

中庄村 長 谷 寺 印

佐古助任寺島橋に付申付御狀

(侯爵録須賀家所藏  
御代々様御書寫抄出)

以上

態如此候

一 佐古すけたふの小橋定て漸可出来候不及申聞常々人々通所にて候間つくねんを入専一候事  
一 右之両所之橋之材木一本成共相殘を□可置候きれまでもうせさるやうにねんを入尤候今ほど材  
木大切候事

一寺島橋之材木かつらか相届次第大工召寄可取付候末に成はとさむく事成間敷候事  
一何も請取遣木板共帳を懇に仕可上候謹言

八月廿七日

(御 印)

入郎左衛門とのへ  
平左衛門とのへ

海部郡牟岐渭津間運賃定

海部郡牟岐渭津へ参運賃之定

一三枚帆壹艘

三拾目七分五りん

内 六匁

舟賃

拾八匁

ろ手三人賃但壹人に付六匁宛

六匁七分五りん

飯米日敷拾五日分

一四枚帆壹艘

四拾壹匁者

内 八匁

舟賃

九匁

飯米日敷右同し

(候時録須賀家所藏  
御代々様御書寫中抄出)

貳拾四匁

ろ手四人賃但壹人に付右同し

一五枚帆壹艘

五拾五匁貳分五りん

内 拾四匁

舟賃

三拾目

ろ手五人賃但壹人に付右同し

拾壹匁貳分五りん

飯米日敷右同し

一六端帆壹艘

六拾九匁五分

内 貳拾目

舟賃

三拾六匁

ろ手六人賃但壹人に付右同し

拾六匁

飯米日敷右同し

一七端帆壹艘

八拾五匁七分五りん

内 貳拾八匁

舟賃

四拾貳匁

ろ手七人賃但壹人に付右同し

拾五匁七分五りん

飯米日敷右同

一八端帆壹艘

百目者

内 三拾四匁

舟賃

四拾八匁

ろ手八人賃但壹人に付右同し

拾八匁

飯米日數右同し

以上

全郡日和佐の渭津へ参運賃之定

一三枚帆壹艘

貳拾壹匁四分

内 四匁

舟賃

拾貳匁

ろ手三人賃但壹人に付四匁宛

五匁四分

飯米日數拾貳日分

一四枚帆壹艘

貳拾九匁貳分

内 六匁

舟賃

拾六匁

ろ手四人賃但壹人に付右同し

七匁貳分

飯米日數右同し

一五枚帆壹艘

三拾七匁

内 八匁

舟賃

貳拾目

ろ手五人賃但壹人に付右同し

九匁

飯米日數右全し

一六端帆壹艘

四拾六匁八分

内 拾貳匁

舟賃

貳拾四匁

ろ手六人賃但壹人に付右全し

拾匁八分

飯米日數右全し

一七端帆壹艘

五拾八匁六分

内 拾八匁

舟賃

貳拾八匁

ろ手七人賃但壹人に付右全し

拾貳匁六分

飯米日數右同し

一八端帆壹艘

七拾目四分

内 貳拾四匁

舟賃

三拾貳匁

ろ手八人賃但壹人に付右同し



拾四欠四分

飯米日數右同し

以上

運賃如右定置候條何時も舟召仕候者此通可致下行候也

寛永元年八月六日

太多和長右衛門とのへ

船舶交通に付心得方申付覺

覺

(候爵録須賀家所藏、以奉御家老御兩國へ被申出書付申抄出)

- 一 御兩國之者大阪に住宅仕難罷在御國を不放船持江戸へ荷物積罷越節は彼地御屋敷留守居方へ相理手形取御用於在之は水出船可仕歸帆之節も同人に相理可申也尤御國惣置之船印指可申事
- 一 御兩國住宅之船持共於何國荷物相調大阪の上り從彼地江戸へ於出船は是又留守居方之相理手形を取可致出船直に御國へ歸帆於仕は町船頭之儀は町奉行在邊之者は郡奉行に可申事
- 一 御兩國賣船大坂の上着否御屋敷留守居方へ相理帳に附彼地逗留中留守居指圖次第御用可承也御屋敷近所若火事之節は早速罷出肝煎可申罷戻砌可相理附御定之船印懸船之節は不及言於沖相

茂無懈立置可申若相背者在之者有來通過銀壹枚可召置依品曲事可申付事

- 一 御兩國之船共江戸へ參着於仕者御屋敷にて奉行入方へ右之手形相渡可申御近所若火事之節は御屋敷へ相詰可申其外御用之砌は從奉行方召寄次第罷出可相勤也尤罷登刻は御用於在之者承可申事

一 水主何國者雇候共御國者之船見候は、御關所並於何國茂御國船之由可申事

- 一 御兩國之者他國之者に被雇船主他國之者にて候は、尤御國船之由御關所何國にても不可申若御國船之由於申者曲事可申付事

寛文三年正月廿三日

賀島主水

船往來に付申附覺

覺

(候爵録須賀家所藏、兩國法式之冊中抄録)

- 一 公儀御法度之趣堅可相守事
- 一 諸方之船往來迫門口之儀候條庄屋百姓以下至迄常々無油斷可申付事
- 一 於其表他國並自國之船遭難風及難儀砌者庄屋百姓早々罷出肝煎可申其段兼申附置若不屈者在之

- 一 是郡奉行或代官可申届雖然難指延儀は何分其方任覺悟可申附事
- 一 北浦並迫門内切々行廻懸船其外不寄何事不審成儀於在之は能々可遂吟味事
- 一 往來船懸之者陸へ上並於寄宿は是又可令吟味及強儀亦は走人之様相見者在之は遂穿鑿其上にて可致沙汰事

- 一 家中之下々直人之様申成可令渡海旨於申者遂穿鑿捕奉行人可申達事
- 一 不依何事其方不及了簡儀者仕置之家老に申窺可受指圖事

寛文八年十月五日

(御在判)

中村徳右衛門とのへ

米其他入候節判形之覺

海部郡米其外品々俵子入候節判形人之覺

一 御兩國御藏の買參俵子御藏奉行表判

一 御兩國在々御藏入之者共の買參俵子其處之御代官表判

一 市中商人俵子買參候には町奉行表判

(名西郡林省吾氏所藏 諸御法度控中抄出)

一 給知の買參には給人表判

一 南方表之商人俵子は木頭山奉行表判

一 歩行者御弓者御鐵炮之者御臺所人掃除坊主ヶ様之者は其頭表判

右面々表判各裏判被相加海部郡中所々川口無異儀通候様可申附事

明曆三年二月十九日

長谷川主計  
賀島主水

鴛 大 學 殿

林 大 膳 殿

野々村左門殿

渡海に付制法

覺 舟方々へ渡海之刻制法

(候爵録須賀家所藏 西國法式之冊中抄録)

一手船並賣船荷物積方々渡海之時分俄雖逢難風候無異儀者船有之所類船之内無故荷物を打湊入族船頭別而不相届候自今以後於安宅吟味可仕事付俄浪風荒海上不任心難所へ乗上難遁節は打申荷

物之義船頭可隨差圖無是被打申においては湊へ船着之時分荷物等相改以前に艦綱を取水主以下  
猥舟より上り申間敷候其所々庄屋年寄に相斷出合申上にて船を着船中改之手形取可申事  
一類船は不及言跡を出船之舟共次第着岸之所浦々滯留不遲參耳遭難風或破損或荷物打段偏船頭不  
覺悟故にて其科輕重於安宅吟味之上可有其沙汰但天氣不見定乘おくれ候舟海上日數を經候とて  
卒爾之出船可爲無用事

一船中にて博奕又湊々にて不行儀故荷物令散亂送手形に不合義を船中之者共爲可相掠議之難風を  
幸に仕のみをほかせ或荷物を打或灘目にはせ上旁惡事を仕族大に不届之條船頭水主可爲死罪事  
右條々常々堅可申渡若違背之者於在之者忽成敗可申付候雖爲同類當座之儀者不及言後々成とも  
白狀於仕者其科令赦免褒美可遣之候此趣可被申聞候事

萬治貳年十二月廿五日

賀 島 主 水 殿

漂流物に付申付覺

覺 浦々

(候爵峰須賀家所藏  
兩國法式之冊中抄錄)

一海上並浦々々流寄物何によらず拾申者有之は時至而其品郡奉行方へ申届落着可仕事  
一於浦々往來之船遭難風迷惑仕候節右之者出會水主を可助之旨兼而雖申付置候彌以入精肝煎可申  
船及破損は荷物並舟皆具取集其所へ上置郡奉行へ可申斷事  
一右之趣付無油斷肝煎もの儀は様子聞届上にて褒美可申付若又少に而も相掠候か見のかしに仕  
者於有之は曲事に可申付事

萬治三年十二月廿九日

遭難船救助其他御定書

條々

(三好郡古郷吉右衛門氏所藏  
諸提書中抄出)

一公儀之船は不及申諸廻船共遭難風之時は助船出し船不破損様に成程可情入事  
一船破損之時は其所近き浦之者情入荷物船具等可取揚其場所之荷物之内浮荷物廿分一沈物は十分  
一川船浮荷物十分一沈荷物廿分一取上る者可遣事  
一沖に而荷物はぬる時は於着船之湊其所之代官庄屋出分遂穿鑿船に相殘荷物船具等之分可證文出  
事附船頭浦々之者に申合荷物盜取はぬる由於僞申者後日聞といふとも船頭は勿論申合輩可被行

死罪事

- 一 湊に永々船を懸置置有之は其子細を所之者相尋日和次第早々可致出船其上に而も令難遊何方の船と承届其浦々の地頭代官へ急度可申達事
  - 一 御城米廻之刻船具水主不足之惡船に不可積之並日和能節於船破損は船主沖之船頭可爲曲事愆而理不盡之儀申懸又は私曲に於有之は可申出縱雖爲同類其科を免し御褒美可被下且又
  - 一 自然寄船並荷物於流來者可揚置之半年過迄荷主於無之は揚置之輩可取之日數過荷主雖爲出來不可返之雖然其所地頭代官可受指圖事
  - 一 博奕總而賭之諸勝負彌堅可爲停止事
- 右之條々可相守此旨若惡事仕は可申出急度褒美可被下科人は罪之隨輕重に可爲御沙汰者也
- 寬文七年閏二月十八日 奉 行

大坂口並津田川口改方心得寫

板野郡大坂口御番仕様之事

(三好部古稱吉右衛門氏所藏諸掟書中抄出)

一 御家中侍分々讃州へ參家來之男女長坂四郎太夫手形に而通し可申事但御直衆は大身小身によら

す手形なく可相通事

- 一 御國在々々讃州へ參男女は町奉行手形に而通可申事
- 一 自他國御國へ參儀は飛脚之儀落着之先主御番人相改様子見届通可申何方同所へ參候と子細書留置可申事

一 淡州自在々讃州へ參人不寄男女津田新五兵衛佐甚左衛門手形に而通可申事

右は賀島主水殿修須賀式部殿山田豊前殿長谷川万太郎殿御相談を以被仰付候條堅可相守事

寬文九年酉五月三日

大坂口へ拂遣置候

- 鳴 八左衛門 前 田 伊 兵 衛 内 海 彌 五 太 夫
- 長 坂 四 郎 太 夫 萩 野 四 郎 右 衛 門 福 屋 甚 太 夫
- 津 田 新 五 兵 衛 佐 治 甚 左 衛 門 印 形 遣 置 候
- 津 田 川 口 改 之 覺

一 自大坂罷下人之儀は御國他國共松崎五郎兵衛手形に而如先規可通事

一 自他國御家中侍中へ參人之儀は其落着に其島の宗門改御奉行裏判を以相通可申事

- 一市中之者他國へ參罷歸り候節其町人手形にて町下代見印加可通事
- 一市中へ參商人之儀は問屋へ直に參相改手形取可通事
- 一自御國他國へ罷出女之儀御山下分は島八左衛門裏判又は手形に而如先規相通可申事
- 一在々々他國へ罷出女之儀其手崎郡御奉行裏判又は手形に而如先規相通可申事
- 一御關船並商船共に積下酒之儀は猪子七兵衛手形にて如先規相通可申事
- 一御關船川口へ出入共に御番所へ寄させ御法度之趣可相改事
- 一自御國在へ參候者之儀近村之者其村之庄屋直に參り相改手形を取可相通附遠所之儀は當分請人を取通可申候追而右落着在所之庄屋手形其郡
- 一御兩國浦々在々々參船之儀其所之庄屋並年寄五人與右之者之内何れに而も一人手形の判形を以相通其手形船頭に渡被罷戻節右之手形其郡下代見印加へさせ請取可相通事
- 一魚船之儀其問屋手形に而可相通事

右之通賀島主水殿蜂須賀式部殿山田豊前殿長谷川萬太郎殿御相談被仰渡候條堅可相守事

寛文九年酉五月三日

他國積出荷物に付申渡

覺

(名西郡林音吾氏所藏 諸法度控申抄出)

- 一御兩國之者大坂住宅仕罷在候共不放御國持船江戸荷物積罷在申節は彼地御屋敷御留主居方へ相理手形取御用も候は、承出船可仕歸帆之節も同人に相斷可申候
- 一御兩國住宅船持共何國に而荷物相調大坂へ登彼地を江戸へ出船仕候は、是亦留主居方へ相斷手形取出船可仕候直に御國へ歸帆仕候は、船頭之義は町奉行在邊之者は郡奉行へ可申斷事
- 一御兩國賣船大坂へ上着否御屋敷留主居方へ相斷帳に付彼地逗留中留主居指圖次第御用可承若御屋敷近所火事之節は早々罷出肝煎可申候罷戻節も可相斷候付御定之船印懸船之時不及言沖合にても無解意印立可申候相背者於有之は有來通過銀壹枚可被召上品に曲事可申付事
- 一御兩國之船頭共江戸へ參着仕候は、御屋敷にて奉行方へ相斷右手形相渡可申候若御近所火事之節は御屋敷相詰可申候其外御用之刻は奉行方召寄次第罷出可相勤尤罷登時は御用候は、承可申事
- 一水主何國之者雇候共御國之者之船に候は、御關所並何所共御國船由可申事
- 一御國之者他國之者に被雇船主他國之者にて候は、尤御國之者之由關所何國にても申間敷候若御

國船之由申候は、曲事可申付事

右之通市中在々船持共に堅申付候旨被仰付候條得其意面々手崎之者共可被申渡候 以上

寛文十三年

賀島主水

鳩 八左衛門殿

福屋彦太郎殿

沖平六殿

内海彌五太夫殿

庄屋五人與等往來切手御觸並請書寫

(長尾浦郡二氏所藏)

他國へ罷越候庄屋五人與百姓共往々手形切手之義御觸之寫並御請書

百姓共伊勢大峯其湯治又は用事に付他國へ罷越候節切手之儀區々相成居候に付此後之義左之通  
究方申付候條右之趣其方共組村浦逸々相觸奉畏旨之請書組切取揃可指出候尤此狀披見の上承知印  
加へ先々無違滞相廻相濟村可指戻候 以上

享和貳戌年九月十二日

眞殿新五  
谷 良右衛門

勝浦郡與頭庄屋方へ

一 百姓見懸人其余村役人支配之者共は不殘所役人支配之者共は不殘所役人切手に願書添可指出候  
得は右切手に御郡代遂見印指遣候に付右切手之義往來共懷紙に仕其段書願指出候事

一 寺院郷高取壹領壹正郡付浪人杯之類所役人支配外之者並庄屋五人組等於願出は御郡代直切手往  
來共指遣候事並女切手之義も是迄之通直切手指遣候事

一 四國遍路切手之義は是迄之通御郡代切手指遣候事 以上

右之通他國へ罷越候節切手指出方此後之儀右之通御究方被仰付候條御本文之御趣奉畏旨村切  
庄屋五人組中連判御請書來る廿六日切無間違御指越可有之候取揃指上可申候此狀先々無違滞御  
廻し濟村可御戻し可有之候 以上

戌九月廿二日

田村昌右衛門

右之通他國へ罷越候節切手之儀御觸之御趣承知奉畏候に付御請書仕指上申候 以上

九月廿五日

新居見村庄屋五人組 印

御郡代様御手代當て

旅行手形寫

覺

僧俗貳人圓元下人萬兵衛右は勝浦郡本庄村田林寺隱居並下人に相違無之候條行碁候節宿舟渡に此手形を以當寅年より來る午年迄五ヶ年之間不可有異議者也

文化三寅年四月廿六日

澁谷彦九郎  
高木正兵衛

南北在々庄屋共方へ

右之通御郡代御手形持参いたし罷出申候御留主故本紙之通殘書致置候右之通御承知可被下候以上

渡海船乗主之義願上覺

(板野郡則氏所藏)

乍恐奉願上覺

別宮鶴島宮島長原右四ヶ浦が先達而數度御願申上候渡海船乗主之儀大坂が南北乗主是迄無滯乘せ來り渡世相送居申候所去る子年己來津田沖須兩浦が名東名西阿波麻植三馬三好右六郡之儀は大坂が乗主之儀兩浦の相限り候様御願申上るに付外浦之儀は大坂が乗主乘せる儀相調不申様大坂御屋

鋪様の宿屋中へ被仰渡候御趣奉承知候其以來度々迷惑之旨奉願上候に付六郡並板野組頭庄屋衆中へ御行着被仰付双方之手前御糺被仰付御約め上に相成其節私共申上候は御國內一牧大阪の参り合候船頭共の乗主乘せ候様被仰付被爲下候得は道者亦是荷主商人によらず至極辨理宜敷乗主迷惑成不申に付御國內一牧融通被仰付候様申上候處今以何之御成下り無御座候に付尙亦未三月に御竊奉申上候處渡海乗主一卷之儀は大坂御屋鋪様の御達し成候御趣被仰付奉畏候願之所有之候得は大坂御屋鋪様の願出候様被仰付候に付右四ヶ浦船頭共の安宅御船頭宮崎助殿相頼大坂御屋鋪様の御懸合被下候處四ヶ浦渡海船之儀は渡海船とは相違立浦船と相立候候被思召渡海之儀は津田沖須兩浦之相限り候様被仰付候御趣私共浦々之儀は古來が渡海船にて御座候右兩浦が古き浦柄にて根元渡海之元に而御座候先年數度御陣之度毎に船數御用被仰付三拾艘余も御用相動候儀も毎年御座候是等之儀は勤功にも難相立被思召候儀哉津田沖須兩浦之儀は右様之御用は相動候儀は無御座候中興の御用相動申儀に御座候津田浦之義は寛永年中迄無御座候沖須浦之義も寛永年中迄聊之家數に而御座候前顯申上候通根元渡海元立之儀は右四ヶ浦の相限り候様相心得居申候右兩浦が私共四ヶ浦之儀は古き御用相動居申儀に御座候然れ共唯今に至り渡海船とは難相立浦船と御唱渡海と難相立御儀に御座候得は恐多く御願とは奉存候得共左之株々御免奉願上候

一當國の大坂の御上米御免奉願上候  
 一荷積方御小切之儀 右同斷  
 一大坂の御役船之儀 右同斷  
 一大坂並御國の御材木御用之儀 右同斷  
 一御急手御用 右同斷  
 一御陣御用之儀 右同斷  
 一大坂廻船と相立儀に御座候得は帆懸り銀之儀 右同斷  
 一市中紀伊國屋三右衛門出切手帆壹端に付壹分五厘宛相懸り 右同斷  
 一淡州須本行御用 右同斷

右は撫養北灘八ヶ浦之儀は浦船と相立右御用之儀は相勤不申私共四ヶ浦之儀は前顯之通先年か右御用無滞相勤居申候處唯今に至り大坂御屋鋪様か右四ヶ浦之儀は渡海船に難相立御趣被仰付渡海之儀は津田沖須河浦へ相限り候様被仰聞前條申上る株々之儀御赦免被仰付被爲下候得は右乗主一件之儀は右兩浦の相限り被仰付候ても最早御願之儀は指控可申候間右之段 撫養北灘同様

に被仰付被爲下候得は重々一偏に難有仕合に奉存候右之通未申の八月に御願奉申上候得共何之御

成下りも無御座候に付尙亦此度御願奉申上候何卒御慈悲之上急々御成り下りも御座候様奉願上候

以上

文政八酉年八月

板野郡別宮浦船頭

小兵衛 平兵衛 勇藏 權左衛門 清右衛門 六兵衛 銀次郎 作右衛門

同郡鶴島浦船頭

同郡長原浦船頭

板野勝浦御郡代様御手代

黒田 安左衛門殿  
 野口 是兵衛殿  
 笹倉 眞佐助殿

右之通四ヶ浦船頭共大坂渡海乗主一件之儀先達而數度奉願上候所今以何之御成り下りも無御座候



に付向亦未三月御伺申上候處乗主一卷之儀は大坂御屋鋪様御達し成居申候旨被仰聞候に付船頭共大坂御屋鋪様承合候所四ヶ浦之儀は渡海船とは難相立被思召候様四ヶ浦之儀は浦船と被仰聞候旨尚亦私共は浦船とは不奉存候根元渡海之儀は四ヶ浦へ相限り候様乍恐奉存候津田沖須之儀は中興御用等相勤居申儀に御座候四ヶ浦船頭共奉願上通御聞届不被爲仰付候得は前條申上る通九品之株々御用捨被仰付被爲下候得は私共壹統難有仕合に奉存候 以上

酉八月

板野郡別宮浦庄屋 森 當左衛門

全郡鶴島浦庄屋

全郡宮島浦庄屋 澤口 友左衛門

板野勝浦御郡代様御手代

黒田 安左衛門 殿

野口 是兵衛 殿

笹倉 眞佐助 殿

往來手形

覺

(海部郡 幸雄氏所藏)

男貳人

海部郡荒村神主

佐藤 賀津馬

同下人 次右衛門

右者平井村轟明神本社拜殿鳥井共及大破右爲修復此節來成年迄海部郡中相對勤化之儀願出承届候條此節來戌年中共此手形を以止宿船渡等無異儀可申付候 以上

嘉永二酉年八月四日

高木 眞藏

淺田 久米之丞

井村 吉兵衛

海部郡中浦村役人共方へ

浦手形

浦手形之事

(勝浦郡 功氏所藏)

其御國高岡郡并尻浦藤之助三枚帆拾八石七斗積沖船頭木曾平水主喜代助炊徳太郎三人乘にて去七月廿二日御本國於須崎浦に諸紙積入全廿四日福島浦におゐて經節積入紀洲和歌山表被積越候積にて被致荷仕舞候得共出帆天氣無之去月廿日出帆全廿一日二日手井崎沖合にて滞船翌廿三日津路湊入船廿四日一日滞船翌廿五日津路口出帆當國由岐浦へ入船被致候所北風にて出帆不相調全晦

日迄滯船翌朝日紀州地沖合にて滯船翌二日和歌山へ被致入津候心得にて被乘懸候得共東風強乘拔候義不相調沼島沖合を當國へ指向被乘戻全日八つ時頃當國勝浦郡大原浦龍川口へ着船被致船頭喜曾平義早速上陸城下表之賣事懸合に被參候所其夜九つ時頃を北東風烈敷大雨に相成色々心配被致旋等入増無油斷手當被致候内翌三日曉を俄烈敷西風に吹變り其上出水急流にて旋綱押切右川口小濱に申所迄流出向亦旋指入力限り被相働候得共風波彌相募り古船之儀故滄之道出來水込に相成被致粉骨碎身候得共解等も流失所詮助命無覺束被存最早此上は地方へ游寄候外無之與兩人被申談徳太郎義先へ飛入喜代助義に追付飛入思々に游出徳太郎義漸地方へ游着見返候所喜代助相見不申大に相驚被心痛候得共行衝不相分風波之沖に而其身逆も助兼候場合何之手便も相調不申漸山傳に而人家を尋兵助と申者之方迄被參右有様被申述べ方に而衣類被致借用支度相仕舞直撥兵助同道破船之場所へ被罷越候所船之儀は地方へ打揚微塵及破損喜代助死骸其近邊岩間を流着居候旨等兵助方を申出候に付浦人召連罷越散亂之荷物並船具船滓等夫々取都番人付置右之趣城下御郡代所及注進候所右難船溺死之一條爲御札郡代下役黒田寛平出張其上勝浦郡大庄屋田村康太郎へも出張被申付罷越拙者共召連右喜代助死骸見分之上惣身者疵無之疑敷子細相見へ不申候得共乘組中不和之義は無之哉と被相尋其上乘組中諸事不自由成義無之哉用事等有之候得者無遠慮申出候様且流失之品等

有之候得者浦々々觸達に及遂穿鑿可遣旨申聞候所乘組中破船已後浦役人々衣食万端心添厚致世話吳候義故何以不自由指支候義無之乘組中素々平素不和之義毛頭無之旨被申出尤積荷之内紙拾六丸鏝節三拾束五拾貳節旋貳挺校招繩一筋流失に及候得共烈敷風波之中場廣海面を流出候義と相見へ右夫々聊之銀目に而何以殘心無御座最早詮義向指止吳候様被申出此上は喜代助死骸當所三味へ被致取隱度旨被申出候に付任其意に江田村真言宗寶聚寺道師を以相葬候に御座候隨而取揚候紙鏝節其餘船具船滓等は如何可仕哉と大庄屋を相鍛候所紙之儀は水漬りに相成持歸り義相調不申於當地に賣拂度鏝節並船具船滓等は相應之直積を以御定法之通歩一銀指出便船を以被積返旨被申出候に付早速城下紙屋共へ相配望人入札八枚取揃船頭炊立合於一座に開札いたし落札銀高に相渡候義且鏝節船具船滓之義は其筋に工者成者呼寄左書之通直積爲致候右夫々存志有之候得は無指扣被申出候様相鍛候所落札銀高相應之直段に相見へ候に付相渡度旨積直段之儀も存志無之旨被申出候

- 一橋 壹本 代 五匁
- 一帆 九端 代 貳百目
- 一中帆 四端 代 拾四匁
- 一掛 壹 代 五匁

一樽	三挺	代	拾五匁
一水棹	拾五本	代	五匁
一苧綱	貳筋	代	百目
一檜綱	貳筋	代	拾五匁
一水繩	壹筋	代	貳拾目
一苧綱	壹筋	代	貳拾目
一小綱品々		代	拾五匁
一紙	百五丸	代	壹貫七百八拾目
一船滓品々		代	九匁
拾三株			
代東而	貳貫貳百九匁		
此步一銀百拾匁四分五厘			
但浮物に付貳拾步一銀			
一鏝節	拾貳束	代	五百四拾目

一錠 貳挺 代 百三拾目

一錠 貳株

代東而 六百七拾目

此步一銀六拾七匁

但沈物に付拾步一銀

步一銀貳口

束而 百七拾七匁四分五厘

流失之品

一紙 拾六丸

一錠 貳挺

一鏝節 三拾束五拾三節

一校欄綱 壹筋

一校欄綱 四株

右は此度破損溺死一件に付始末取都之上喜代助溺死並諸品流散之義に付大原浦其外近村浦並對指

含候義は無之哉存志有之候得は無指控被申出候様再三念入申述候所喜代助死骸見分を被請寺院尊師を以最寄三昧へ相葬厚厄介を請其上黒田寛平出張並大庄屋打詰諸事差配に及候義故大原浦は勿論近村浦へ對差含候義毛頭無之旨被申出候隨而船頭炊御國許へ送届可申旨申聞候所浦手形申受陸地被罷歸候方勝手成候旨被申出且破損以來飯米鹽増宿拂等可仕旨被申出候得共其儀不及旨申聞候所夫々相拂不申候而は何れも爲不宜旨に申出候に付任其意に候惣休海上之儀は委敷不存事に候得共船頭炊手前被是相糺有体口上書取置浦手形指出申所如件

嘉永三戌年九月

阿州勝浦郡大原浦庄屋

富永 淺右衛門

同浦五人與兼

彌 太  
龜 助  
万 藏  
文 兵衛  
兵 藏

土州高岡郡井尻村御庄屋

藤野 彦四郎 殿

右之通相改處如件

勝浦郡大庄屋

田村 康太郎

女 通 行 手 形 定

(名東郡林省吾氏所藏  
講法度掟中抄出)

一御國中他國が在邊へ參女之儀近村は其村之庄屋直に參改手形取可相通候遠所之儀は當分請人取  
通可申候追而右落着之在所庄屋手形に其郡下代見印加へ取置可申候若庄屋手形延引之節此方へ  
可申來事

一御國內在邊へ日歸に參女之儀其所之庄屋手形に而可相通事

一讚州在邊を參女之儀其郡御奉行庄屋手形にて如先規可相通事

四國順拜切手乞請に付違書

(那賀郡  
湯淺高太郎氏所藏)

一筆致啓進候紀州日高郡岩田村醫師鈴木立庵同伴數馬並下入下女共左書之通四國靈場順拜として  
罷下度切手之義彼御方様御役人が願越候に付實に靈場順拜に罷下候哉難計候得共靈場順拜之願に  
寄切手相渡候義は是迄多引合も有之義故斷にも難相及無據切手相渡指下候義に候得共靈場順禮迄

之事とも確に難決体に寄候得は何ぞ相舍居申程も難計存候に付此段先以及御文通置候條彼是御舍置可被成靈場拜禮申根元之主意に相振候所業御座候得は早々御送戻し可被成候 恐惶謹言

未十月三日

坪井榮太郎

- 津田角兵衛様
- 森満介様
- 生駒彦吉様
- 高木真之助様
- 武市左兵衛様
- 赤川三郎右衛門様
- 三間勝藏様
- 原與右衛門様
- 岡本吉右衛門様
- 高木真藏様

- 岩田村醫師
- 鈴木立庵
- 同 數馬

下人 徳右衛門

同 要助

同 仁平

同 慶次郎

下女 きぬ

右之通大阪御留主申來候に付出會組頭庄屋へ申含置郷目付小庄屋五人組へも申付置候様遂了簡候事

右之通中島浦組頭庄屋中川茂兵衛申繼候條御本文篤と御心得置四國靈場拜禮申根元に相振候義有之候得は可然様了簡可被成候此狀急々順達濟村へ早速可被指戻候 以上

未十一月五日

湯淺重次郎

- 拜宮 東尾 菖蒲 長安 檜曾根 臼ヶ谷 櫻谷 音谷 小濱

右村々御目附肝煎五人組中

粮米に係る御請書寫

御請書之覺

(板野郡 森敬則氏所藏)

地他國船出帆之節糶米と相唱過分に積入仕候哉に被爲思召候に付右御究私共船手之者左之通相究可申候

一 地國近國通船上下日數廿日と相積水主壹人壹日七合五勺宛に仕壹斗五升積入させ出帆仕候様被仰付度奉存候

但安宅御用浦水主壹人壹日七合五勺被下置候に付本文之通申上儀御座候

御國內所々にて糶米無之節役人共手元へ申出指圖を請相調候様被仰付度奉存候近國通之船水

主貳人々五人乘にて右水主壹人壹日還迄八合程宛積入候に付本文之通申上儀に御座候

一 江戸廻船の儀は壹艘拾人乗と相定上下日數七十日と相積五石貳斗五升宛出帆の節積入させ候様被仰付度奉存候

但し江戸廻船の儀水主壹人壹日八合程宛積りを以積入候所近年は壹升程宛積入候様相見へ不都合に奉存候に付本文之通申上儀に御座候

一 他國船之義入津仕糶米無之節水主壹人五合宛日々賣出候様尤入津の上其地船問屋を役人共へ案内仕船問屋手元を取次買求候様賣方之者船問屋の手を放れ船手へ直賣不仕様御究置被仰付度尤船問屋の儀も米商人と馴合船手へ商賣仕候様の義御座候へは双方稠數御咎被仰付度奉存候

但他國船水主壹人五合宛に申上候義江戸表並諸國共壹人五合宛ならては賣不申趣此節相聞候に付本文之通申上儀に御座候尤他國船たりとも出帆之節糶米無之候而は迷惑可申に付壹人壹日五合日數二日分積入させ候様被仰付度候且地他國船共出帆之節役人共立合見改候上出帆仕らせ候得は不正無御座候様奉存候

右之通被仰付候得は諸船糶米と相唱過分に積出候儀無御座に付已後御取究方私共連判御請書指上申所相違無御座候 以上

己の十一月

- |       |    |      |
|-------|----|------|
| 別宮浦庄屋 | 森  | 當左衛門 |
| 長原浦庄屋 | 板東 | 爲七   |
| 宮島浦   | 澤口 | 友左衛門 |
| 鶴島浦   | 吉田 | 庄助   |
| 鈴江村   | 齋藤 | 次兵衛  |
| 笹木野村  | 本  | 十郎   |
| 五人組   | 伊勢 | 左衛門  |

近藤 庄作殿  
近藤 吉兵衛殿

御番所修繕入目控

申上覺

大坂口御番所御門破損御取繕所積増之ヶ所一昨寅年所積御仕様帳面差上御座候處此砌右仕様通に而御繕成義に候得は早々御繕に取懸可申尤出来難致候得は仕様積直に今朝四つ時迄に可申上様猶一昨寅年仕様之通に而御繕出来成義に候得は此段も可申上様御配昨廿日朝五つ半時奉拜狀直様右村方へ出張仕村役人並大工手元夫々手詰に及候處一昨寅年御仕様帳面差上候通に而片時も御繕仕度旨申出候尤一昨寅年帳面差上候砌と只今に而は何敷之直違も少々宛御座候哉に奉存候得共右平均仕候而は格別之違目も相立不申様相見込候得共實數御入目相居候は、差引書追而御覽に相供へ申度奉存義に御座候然る處右村方御給人長坂三郎左衛門様御用金余程相懸り候に付而は村内におゐて少も融通不仕然におゐては木材相調候義も難出来候に付兼而帳面に而申上候員數四貫四百八拾目貳分壹厘増御繕御入目銀此内四貫目程御立用御下渡被仰付候におゐては早々木材相調急速に取懸御繕仕度奉存候右之段不取敢私共書付を以申上候 以上

辰正月廿一日

坂東孝兵衛  
吉田次郎兵衛

(坂野次郎氏所藏)

御手代中當て

御番所修繕入目控

申上覺

一銀札四貫貳百三拾六匁七分

但御番所御門御取繕實數御入目に御座候

内 四貫目

但當正月御普請に取懸り可申に付而は拜借奉願上候所御聞之上御銀御下渡被仰付員數に

御座候

差引殘

右之通大坂口御番所御門御取繕實數御入目之内にて拜借之株差引殘前顯員數之通何卒早々御銀御下渡被仰付可被下候右之段横切を以申上候間可然様被仰上可被下候 以上

辰 七 月

坂東孝兵衛  
吉田次郎兵衛

(坂野次郎氏所藏)

園木  
仁木  
吉本  
片山

御番所修繕入目控  
申上覺

(板野次郎氏所藏)

大坂口御番所御門破損御取繕所積疹増之ヶ所當春御普請被仰付則皆御出來之旨先達而申上置候義に御座候隨而諸御入目重々手を詰候上別帳面之通實數取都石村役人共々爲差出候に付私共添書仕差上申候間可然様被仰上可被下候 以上

慶應四年七月

坂東孝兵衛  
吉田次郎兵衛

御那代様御手代

園木辰之丞殿  
仁木万次郎殿

吉本熊五郎殿  
片山助之丞殿

御番所修繕入目控

(板野次郎氏所藏)

一六拾五匁

柱厚六寸平壹尺角物一丈一本

一拾八匁

杉五寸角一丈物一本

一百三拾目

中引松二間物厚五寸幅八寸一本 梁厚四寸幅七寸一丈物三本 梁受厚四寸幅七寸一丈物一本

但右松木市中に而相尋候處存外高價御座候上運賃濱上本手間等多相懸候に付大坂村に而松木相調右五本に相用候木代本文の通

一七拾八匁

杉二間物桁棟木とも三本一本に付廿六匁宛

一三拾六匁

松ぬめ上六挺一挺に付六匁宛

但柱固め控柱貫三通宛左右に相用候尤以前杉割物之仕用に御座候得共御爲成不申に付松ぬめ相用候



一四拾目 杉破風板四枚一枚に付拾五宛

一六拾五宛 杉二寸角一丈垂木廿六本一本に付貳匁五分宛

一六拾五宛 杉五分板五間半一間に付三拾匁替

但屋根裏板五間外に半間腰板増とも本文之通尤地盤相用御座候内疹無之分取調相用候積之處  
何れも相疹居申に付不殘取替申候

一貳拾四匁 杉廣ごまへ二挺一挺に付拾貳匁宛

一拾四匁 瓦座二挺一挺に付七匁宛

一拾六匁 杉品板四枚一枚に付四匁宛

一拾五匁 棟木杉小柱三本代

一六匁 棟木小柱貫一挺

一三拾貳匁 棚戸かばち二挺一挺に拾六匁宛

一三拾四匁 なまづ木杉二間物二本一本に付拾七匁宛

一三拾五匁 後 杉皮七間一間に付五匁宛

一貳拾五匁 前 小柄竹五束一束に付五匁宛

一八拾四匁壹分 重目 足り四寸五百懸目一貫四百五十目百目に付五匁八分替

一五拾四匁 上四寸六百本

一三拾目 上三寸五百本

一拾四匁 二寸五分二百本

但此株積落に相成居申候分

一九拾目 木材其余品々市中々大寺濱迄運賃

一貳百貳拾壹匁 人夫十六人一人に付飯代とも十三匁宛

但木材大寺濱々御番所迄持送人夫並前願中引梁梁受等に相用候松木取寄人とも本文之通

一五拾目 濱上駄賃五駄一駄に付拾匁宛

但右之外石灰杉皮すゝ類等

増株

一四拾目 木挽二人工一人に付飯代とも廿目宛

但前願中引梁梁受等に切小成に召仕候木挽賃本文之通

一六拾目 石工三人一人に付飯代とも廿目宛

但柱石蹴放し敷石並左右石垣相修居申召仕候石工賃本文之通

一九百壹匁 後 大工手間五十三人一人に付飯代とも十七匁宛

一九拾壹匁 前 荒石取寄手間石工手傳とも人夫七人壹人に付飯代とも十三匁宛

一三百拾貳匁 人夫二十四人一人に付飯代とも十三匁宛

但足代拵木材借戻し並關門取崩建前手傳瓦洗手間等に召仕候人夫都合本文之通

合貳貫七百四拾五匁壹分

内 三拾目 但殘釘代引

差引 貳貫七百拾五匁壹分

一百貳拾四匁 石灰八俵一俵に付十五匁五分

一六拾四匁 ふのり二貫目一貫目に付三十二匁替

一貳拾壹匁 後 綱すさ七貫目一貫目に付三匁替

一四拾目 前 中切芋すさ二貫目一貫目に付二十匁替

一拾六匁五分 前 地切芋すさ五百目一貫目に付三十三匁替

一九匁 松やに三百目百目に付三分替

一五匁壹分

油三合代

一拾三匁 番繩二束代一束に付六匁五分替

一拾五匁 薪代

一貳拾目 山土駄賃はり手間とも

一七拾六匁 左官手間工荒屋根四人一人に付飯代とも拾九匁宛

一貳百八匁 荒屋根手傳土ねり手間とも十六人一人に付飯代とも十三匁宛

一五百拾三匁 總油石灰左官手間工廿七人一人に付十九匁宛

一三百七拾七匁 右手傳人夫廿九人一人に付飯代とも十三匁宛

一壹貫五百壹匁六分

一貳拾目 損料

但御門大破に付去る子年かつかに相用候松木最寄に而借台御座候處最早五ヶ年にも相成候事

故餘程相修居申に付本文之通損料差遣申候

三株

合四貫貳百三拾六匁七分

右は大坂口御番所關門疹増之ヶ所御取繕諸御入目實數相都差上申候

二三八〇  
以上

慶應四辰年七月

西川眞佐右衛門

吉 彌

權左衛門

又左衛門

關之丞

宗 助

坂東孝兵衛殿

吉田次郎兵衛殿

御番所修繕入目控

申上 覺

(板野次郎氏所藏)

大坂村御番所關門御普請之義先達而被仰渡候以來精々相急き切組仕建替御出來付而は屋根廻り油石灰相濟皆御出來に相成候に付御案内申上候且又關門戸前地盤之分其儘相用候に付而は移合不宜候義故柱戸前中引蹴込等玉墨を以溢塗に仕候は御爲も成候而已ならず見込も却而宜敷候様御番

人中申談御座候に付私共御役場へ罷越厚申談仕候處至極之御義哉にも奉存此上少々之御入目増にも候得は御例之程は相心得兼候へ共右様被仰付候而は如何可有御座御義哉心得方奉伺候早々御下知被仰聞度奉伺候將亦惣御入目之義は實數帳面に相仕立前指上候處積御入目額差引清算仕跡の御覽に備申度奉存候先不取敢皆御出來御案内墨塗仕立之義も相束申上候間可然様被仰上可被下候以上

坂東 吉田  
御手代四人當て

鮎喰川舟橋出入濟口書寫

再三御鍛に付申上濟口書付覺

再應御札に付申上覺

(名東郡一氏所藏)

天保七申年三月廿七日  
鮎喰川取渡舟橋之儀南岩延和田河村出入に相及居申處先達而以來度々御行着候上重々御取扱被仰附候得共兎角相片付不申且は右場所通路煩敷往來之諸人難遊不少且又右舟橋施米として近郷村々を數年米麥取集候得共施米村通路便利並舟橋裁判之者身業而已に而聊諸人之助にも不罷成何之切

も相立不申年々廣大之費に相成居申に付此度御存寄を以右近郷村々々指出候施米纒五六年之間相積其上諸方□□之輩助力を請右余有を以舟橋永代無錢渡に相仕居候時は第一諸御用御便利は勿論往來之諸人通路無指支大に相究可申に付右場所無錢渡に相居候而も當村におゐて迷惑之趣意も無之故障ケ間敷筋は無之哉當村百姓共相行着否書付を以申出候様被仰付奉長左に御答申上候

一南岩延和田兩村御行着に付申上候此度御存寄を以鮎喰川舟橋永代無錢渡に相居り候におゐては第一諸御用御便利は不及申上往來通路無指支諸人大に相究誠に廣大之陰徳とも罷成至極之御趣法と奉存候就而は當村におゐて右無錢渡之儀に付何以迷惑之趣意も無御座聊故障ケ間敷筋は毛頭無御座兩村百姓共におゐても壹統難有心得供々御世話仕度奉存候乍併南岩延村之義は先達而も申上通舟橋運上銀として年々銀札貳百六拾目宛數年請取來居申所番非人共不心得之義御座候に付舟橋裁判取放義に御座候然所右舟橋(所務)年分余程之見込御座候に付而は彌無錢渡成就之節は銀札七百目余請取度旨申上候所に仰被聞候は右申出之通成程七百目余之見込も可有之候得共先達而已來兩村數年出入成居申懸に付何れ和田村へも割合相渡不申候而は内濟相調不申に付年分惣高七百四拾目と相積り右之内貳百六拾目は迄南岩延村へ請來候分引除殘四百八拾目を貳つ割にして貳百四拾目宛兩村へ割符仕候時は南岩延村之義は右貳百六拾目相加へ都合五百目請

取和田村に貳百四拾目相渡一和内濟可仕旨御入割被仰聞候得とも南岩延村之義は橋懸外之等も引請何れ造用も相懸り且永代之義に候得は右橋懸外造用として五拾目舟乘賃差引六百目都合六百五拾目南岩延村へ請取度旨申上候所尙又被仰聞候は是迄兩村彼是出入成先達而取扱にも有之事故南岩延村へ六百五拾目相渡和田村へ貳百四拾目相渡候時は先達而相立候割合不都合に相成難相行着哉に被思召候得共右之趣を以和田村御行着被遊候所和田村へ申上候は先達而御取扱之通年分所務之内先年々南岩延村へ請取來候通貳百六拾目引除如何程相殘候共兩村二割之算法見合に被仰付候におゐては和田村におゐて多少之□惜は申上間敷候乍併南岩延村前顯申出候通是非共六百五拾目宛年々請取度旨申出候得は割合を以和田村へ三百九拾目御渡被仰付度旨申出候所被仰聞には兩村共右様付登候而は銀高廣大に相成最早了箇難相及内濟にも相基不申運に候得共施米村々へ入割申入今少年數を相延し彼は十ヶ年程施米指出吳候様相頼候時は余程之負數も相生可申に付年分九百九拾目相生候見込を以右之内貳百六拾目は迄南岩延村へ請取來候分引尙又橋懸外造用として五拾目引都合三百拾目引除相殘る六百八拾目を兩村貳つ割にして三百四拾目宛割符仕都合六百五拾目南岩延村へ請取右割合三百四拾目和田村へ請取一和内濟可仕旨重々御入割被仰聞兩村壹統奉長御請奉仕候尤無錢渡に相居候迄只今至取行居申姿を以舟壹艘にて

南岩延村の貳人和田村の貳人宛指出村役人判を以召仕右人夫骨折代之義は是迄有來通往來人  
の相當に舟賃受取右所務を以當時取行渡守之者とも苛(察)之振廻無之様相心得可申旨被仰渡夫  
々奉畏是迄數年出入成居申所此度兩村得心之上一和內濟仕上は於後日違亂無御座候依而兩村惣  
代之者共連判書付を以申上所少も相違無御座候 以上

往來手形

覺

(海部郡 佐藤幸雄氏所藏)

男貳人海部郡若松村神主長太夫同人足房之助右者京都へ罷越候條其許渡海御手配可相成候 以上

卯二月廿九日

本庄 七兵衛

三間 勝藏

山内 忠太夫

江口 甚之丞殿

江口 健藏殿

岡崎番手廢止に付御觸書

(德島市 森政一氏所藏)

今般御改正に付岡崎番手を廢止渡海之儀岡崎村におゐて船問屋取建に相成候事に候隨而人馬並荷  
物運賃共左書株々之通取究申付候條右様相心得町々不洩様可觸知候事

但州本岩屋福良志尾志築紀州加田渡海にも其土地々におゐて船問屋申付候様相成事に候此段も  
爲心得觸知せ可置事

一錢一貫百文

一人前

内百文 問屋料

一馬

十二人前

一長棒駕

四人前

一切棒駕

四人前

一垂駕

二人半前

一長持

四人前

一兩掛

半人前

一笠籠類

一人前

一駄荷並壹人持荷物

半人前

以上

庚午十月

市中大年寄中

民政掛

二三八六

右之通御布告被仰付候條丁々不洩様觸知せ廻濟より可被指戻候也

午十月二十二日

森直次郎印

六番組丁々年寄中

右御觸趣奉畏候

以上

一二十二日

大工町二丁目年寄 米津源兵衛印

一同日

同町三丁目年寄 酒井米藏印

一同日

古物町年寄 後藤利兵衛印

一同日

大工町一丁目年寄補 山口友吉印

一同日

二軒屋町年寄 富藤宅兵衛印

諸船出入改方

(徳島市吉田半三郎氏所蔵 商法局留記中抄出)

川口番所におゐて諸船出入改方之儀舊分一所小切を始其筋に切手証書を以相改通船申付來候所今般歩一所並に諸問屋方裁判等解放しに付ては改方迄規則相立不申而は不正船出入取調も難行調運

に付人出入御年貢積入米穀積出し等之儀は當局が重々取究申付候得共賣買荷物積入出入之砌共役場其筋管轄之者証書指入川口番所におゐて右証書に積荷物引合之上出入申付候得は取究相立可申と存に付一應御打合に相及候間御指障之筋無之候得は役印印鑑所に川口へ指出候様御取計被成度此段御相談に相及候也

九月二日

民政所

商法方御中

小松新田燈明臺之由來

(徳島市 羅波與兵太氏所蔵)

小松新田の燈明臺

燈臺の建設 往時蜂須賀家の參勤交代は津田口よりせられしも全川口の時々埋まりて御召船の出入に差支へしを以て數々夫役を徴して浚渫せしも其効なかりき依て航路を別宮川口に移すこととなり天保三年に大岡新川を掘り抜き小松新田の口へ直線に通ずる航路を開き以來之れより參勤交代せられしが小松新田の口に燈明臺を建設し直線に入航する航路を知らしめば御乗船のみならず商船も目標の便を得へしとて全十二年に藩の經營せらるることとなり其敷地は新田主荒

井孝次郎より寄附せしめ其宅前より東方に新設せらる其構造は木製なれど榭組にて基礎は五間四方に跨り高さは凡そ五丈にして並松よりは二丈餘りも抜き出てければ俗に小松の高燈籠といひ其地を燈臺洲といふ

燈油代と賦課 此の燈明臺の建設費は市郷の豪家及び沿海の船持に寄附せしめ其燈油は一夜一升の豫定にて全所に永住せる金子傳藏に點燈役を命し其給料及び燈油代を市郷一般の町村及び沿海の船持等より課出せしめたりしなり

別越堤を作る 然るに小松の口は漸次水尾筋を北方に傾け從來の如く直線航路を取ること能はざるに至れり依て時の作事奉行長濱文兵衛伊澤早藏伊澤龜之助長濱外記助等は別越堤を築き之れを元形に復すへき設計を凝らし峻陵公に請ひて嘉納せられ嘉永三年の春普請として名東名西板野より毎日交代に三千余人の人夫を徴收し且つ全地方の川舟數百として勝浦郡大神子より石材を運搬せしめ燈明臺より百間、荒井の宅前より七十五間、鶴島新田の境よりは五十間の別越堤を東南へ向け斜めに石巻にて築堤し其内部を浚渫して百五十石の船は荷積のまゝ干潮に直航することゝなれり

河身を改修せんとす 是に於て作事奉行等は議を進め御召船は千石造りなるも人船なれば底入り

浅し故に二百五十石積の荷船の出入りし得るまでにせは御召船は潮を待たずして出入するを得へしとなし尙は峻陵公の許可を得て川口へ南より張り出せる高洲(元の紋波屋新田の在り所)を幅百八十間に長さ十町余を掘り切り浚渫すべく同年四月頃に名東名西板野の人夫を徴發せしめ當時監作付に迫り出役し難き旨にて更に阿波麻植美馬三好に徴せしに約四千人の人夫は高瀬舟にて下り來り宮島金刀比羅神社の附近に宿泊し毎朝未明より船にて高洲に渡り土砂を掘り其南方に積み立てしこと殆んど山の如し其頃民間には大坂に天保山出來て阿波に嘉永山成るといへる程なりき随つて此の人夫等の午餐休憩するため工事場に三間梁に七間乃至十五間の葦小屋七棟を建てしめ飲料の清水を小松新田より船にて運ぶの不便ありたり然るに中通町の堀抜師花屋榮藏之れを聞き峻陵公に申立て全所に掘り抜きをなすへしとて底入り二十九間半に至りて清水を得て二本の掘り抜き井を造り公の激賞を受け益々工事を督勵せられたり

工事の失敗と燈明臺の廢毀 其年の夏或る日の朝四つ時頃より俄かに天候變して暴風雨となり多數の人夫は先きを争ひ高瀬舟を奪ひ合ひ宮島に遁れしため船は衝突轉覆し海中に陥るもの多く二三の溺死人をも出したる程なり故に工事場の葦小屋に來り助くるものなく小屋に残りし監督人を始め我々は唯だ終夜神佛を念し危きを冒しつゝ在りしか夜明けて空晴れしに小屋は殆んど

盛り砂のために埋まり僅に家根を切りて出つれば今迄も山こいはれし砂山は一夜の間に跡もなく散失し勿越堤も水中に埋まり元の如く水尾筋は北方へ流れたれば人工は天事に及ばずと一時工事を中止したり之れより水尾筋は北方に曲線して益々直線とならず而も安政四年の大地震海嘯は尚は一層水尾筋を北流し小松新田の燈臺も航路の便なきに至り文久二戊年頃までは折々點火せしことありしも自然に廢せられ燈臺も毀損に任せて終に元形を失ひしなり然るに積年苦心せし水尾筋は近頃に至り復たも直線となり水底に埋没せし勿越堤も微かに水中に認むる如くなりしを益々潮流變轉の不可思議なるを覺ゆ

右は實父鈴屋善吉義板野郡宮島村に住み會て對岸の愈上り地に六畝程の新開地を作りしより荒井孝次郎に托せられ小松新田の築立に終身従事且つ川浚ひ工事にも監督を命せられ私事も幼時より其事に關せしを以て燈臺の顛末を略叙することゝなせり

德島市北佐古町臺所丁

難波與平太

大正四年 八十三歳

参 考 目 録

阿波國往還道法記	德島市	河野芳太郎氏
自東武至大阪街道使覽	全	全
渡海手配書	全	多田仙次郎氏
他藩人止宿の書狀	勝浦郡	吳服又三氏
往來切手	那賀郡	松浦芳太郎氏
神社佛閣拜禮往來寺請狀	全	清川重吉氏
關所免許切手朱印寫	全	清原タカ氏
仁宇の津渡船造替入目割符帳	全	湯淺高太郎氏
諸產物積下に付願上覺	全	全
高瀬船艘數及船頭取調差出帳	全	全
飯料取運の義に付申上覺	全	全
薩州士分船送手配書	海部郡	久佐木種太郎氏
打越寺旅宿定書	全	板東覺心氏



傳馬賃銀請求書	名	久米總太郎氏
遊行上人御通行往還	板野郡	吉田次郎氏
御普請に付申上覺	全	森敬則氏
御巡見に付船書出覺	全	全
全御用船覺書	全	全
浦手形控	全	多田幸太郎氏
里程表	全	里浦村役場
探禾者宿札寫	全	渡部菊太郎氏
宗門請狀往來手形	麻植郡	住友新十郎氏
四國遍路往來手形	全	全
道普請に付奉願覺	全	武田浦三郎氏
西庄村祖谷山道作仕様帳	美馬郡	喜多平三郎氏
四國遍路往來手形	三好郡	

雜類

犬猫小鳥憐愍御觸覺書

(板野次郎氏所藏)

覺

一犬之儀は不及申猫鳩小鳥に至迄總而生類能々あはれみ可申事  
 一飼置候生類六ヶ敷義も致出來候得はいかゞと心得追はなら申様成義仕間敷候彌以憐飼置可申事  
 一犬之儀は不及申其外生類喰合候刻取分可申然共取分様により一方いたみ申儀も可有之候間兩方  
 共痛み不申様に可仕候事

一犬猫鳩其外生類煩候牀相見候へはいたはり養生仕其上にて死候は念を入其所に埋置可申右之  
 類途中に死候事有之節は其所念を入埋置可申候尤其段可申出候生類あはれみ之義兼々雖被仰出  
 置猶以別紙之通常々忘却不仕候様御國中急度可申付旨御意候條被得其意郷中可申觸候 以上

八月十五日

賀島和泉

樋口内藏之助殿  
 佐渡半兵衛殿  
 寺澤刑馬殿

右之通爲御意段賀島和泉殿被仰出候條奉得其意候面々與村中不寄何者堅相守候様に可相觸候以上

元祿八亥年八月十四日

樋口内藏助  
佐渡半兵衛  
寺澤刑馬

板野郡與頭庄屋とのへ

右之通被仰付候條末々に迄堅相守候様村々不殘御觸可有之候

下庄村 源左衛門

生類御憐之御觸書

(板野郡吉田次郎氏所藏)

覺

一生類御憐之義兼而被仰出候所毎々損申段尤不得止事儀とは乍有之成々御斷被仰上段も如何に思召候此已後犬之義は不及被仰出狼猪懸り來候共可成程はよけ候て損不申様に被思召旨被仰出候右之趣御觸とは無之郷中末々迄相通候様に可被申付候 以上

子の四月十三日

右之通就被仰付郷中屹御觸に不被遊候へ共私共被召寄被爲仰聞候間郡中庄屋共に申傳候様に被仰

渡承知仕奉畏候 以上

子四月十五日

板野郡下庄村庄屋 源左衛門

御國御奉行所御下代

江崎清助殿

右之通被仰付に付私共に被仰聞承知仕候末々に迄慥可申傳候 以上

下庄村庄屋 源左衛門殿

右御觸狀之通り私共召寄被仰聞承知いたし候面々義は不及申召仕中下人並小家之者共迄申聞堅相守可申候爲後日連判如件

元祿九年四月十八日

宅兵衛印  
(外六十八名連判)

吹田村庄屋 次郎兵衛殿  
五人組 彦左衛門殿  
同 金左衛門殿  
同 孫兵衛殿  
同 八兵衛殿

同 利右衛門殿

犬猫小鳥憐愍御觸覺書

(板野次郎氏所藏)

前々從 公儀度々被仰出通犬之義は不及申愆而生類之義御國中至末々迄常々被仰付置候得共向後彌以憐之志厚忘却不仕候様に可申付候若人喚犬於有之は其所を憐愍可申御意候條得其意郷中堅可被申付候 已上

六月十三日

賀島和泉

穰口内藏助殿

佐渡半兵衛殿

西尾夷則殿

寺澤刑馬殿

右之通爲御意賀島和泉殿被仰渡候條得其意面々與村中不寄何者堅相守候様可相觸候 以上

元祿九年子六月十四日

穰口内藏助

佐渡半兵衛

西尾夷則

寺澤刑馬

板野郡與頭庄屋共かたへ

和親外人に對する御個條書

(名東郡阿部増太郎氏所藏)

和親開港交易條約濟之國

俄羅斯 佛蘭西 英吉利 北亞墨利加 和蘭 葡萄牙 孛漏生

右之國々此已後日本沿海へ繁々渡來可有之愆而西洋列國之義開港之後は殊之外親布存候風俗に付海岸之測量は勿論時々致上陸遊歩も可有之外國人御取扱之義諸事是迄之仕成御改革に相成彼より薪水等相望候時は見計相應に差遣し可申又右之爲謝禮金銀錢差出候事も可有之差出候時は無異儀請取御郡代出張先へ可差出望次第通用之金銀に引替可遣候尤私に品物等贈候義は堅御制禁被仰付候事

一外國人之義彼風俗に而重き職柄之者に而も時に寄獨歩可致に付輕取扱申間布事

一外國人船繫有之候得は早速飛脚を以御郡代所へ注進可申出事

一遊歩仕度申出候得は承届遊歩爲致可申去海岸御臺場御備置之大筒等見及度旨申出候共相斷可

申事

二三九八

一遊歩は承届候事には御座候得共爰許之義は邊鄙之土地素々遊歩之場所兼而定無之故如何成不心得者可有之も難計同道人におゐても心配之事に候警衛之者精々心を付居候得共其許達にも右之心得に而遊歩有之度旨前以申聞候事

但本文之義不心得者も可有之難計と渠を成し不申機實意に申達候様可仕候事

一外國人渡來船繫中祝炮と相唱大筒等數發相放候義有之候得共恐怖致間布候且又上陸遊歩之時見物ヶ間布多人數罷出候義は付添之役人共重々心を付取究り可申事

一御兩國之山に上り測量仕度旨申出候時は承届可申但夜中月之高低測量並目印之旗建候事筋總而承届可申事

但し海岸測量之義も同斷之事

一遊歩之時市中は町奉行郷村は御郡代請持之事

但遊歩之節は同心下才判之者差添可申候得とも第一村浦役人付添道案内警固之心得に可罷在候尤同心下才判不罷出候内遊歩致候得は役人迄付添可申將又前條にも有之通見物ヶ間布多人數罷出側近く立寄庵相之義等無之様厚心を用取究可申事

一市中其外にて調物仕度申出候得は承届可申候尤價之儀は何品によらず内問賣買の一倍にて商渡の義江戸表始め外並に商に候間右心附にて商渡可申事

但彼國のトルラル銀一つに付此市之壹兩六拾目之建にて三拾五匁程之積を以算用可仕事

一調物いたし候時付添之役人共爲挨拶商渡候者より品物囉請候義屹と御差留之事

一御國中之者外國人より聊の品囉候とも御郡代出張先へ差出可申候又金銀等囉請候者望次第相當之價に而通用金銀に引替可遣事

一若内分に而金銀其外之品囉請何となく熟意を結追々外國人不詰之義有之候而も訴出不申様に成行候而は不容易之次第に付右之處を嚴重に御取究り被仰付候事

一武器馬具類相求度申出候得は市中は町奉行郷分は御郡代へ申出差圖を請商渡候事

一但刀脇差槍弓箭鉄炮三ツ道具長刀懷劍並具足馬鞍鎧馬具足等之類は本文之通差圖を請相渡右之外大小之鏝並小道具類鞭轡押懸け總而武器に而も附屬の物は外品同様に商渡不苦候事

一外國の者トルラル銀を日本の金銀に引替吳候様申出候へは是は江戸之外に而難相成に付早々重役へ可申出旨申斷置急々御郡代出張先へ可申出事

一日本大判小判貳朱等總而金を外國へ相渡候義は難相成尤世上通用金之外細工物等之金は不苦候

事

一牛馬相求度申出候得は斷申達候事

但牛馬は農業之爲繋置候故相渡候得は農業之差支に相成不得止事斷申候江戸近邊の様に荷物運送の爲數多繋置候義には無之家業必用の砌に付難相整と申聞る事

一鶏相求度旨申出候得は右は

御國中之者慰に少々蓄置候事故食料に相成候程は無之且鶏卵を取それを家業に仕者も有之鶏相渡候時は忽其者家業に相放れ候故何分難相渡無據斷候事

一鶏卵相求度旨申出候へは商渡可申尤拂底之時は有体に其趣申聞候事

一外國人近海にて各難破船に及無據

御國海岸へ罷越右之繕仕度に付材木相求度其外右繕に付人用之物品調度旨申出候得は承届夫々相渡候事

但赤銅相渡候義は兼而公邊御取究も有之に付村浦役人共に而は難及了簡早々重役へ申出候旨相斷置急々御郡代出張先へ可申出候事

一御役人へ應接仕度申出候得は早速御郡代出張先へ可申出候事

一御役人へ應接之義多分は野外之應接に而相濟可申乍去何そ込入候時か又は雨天之節は人家へ呼入應接に及候事

一外國人は疊之上に而も履之儘上る風俗に而候是等は兼而相心得罷在渠之無禮を咎不申様可心得事

一應接之節人家に候得は烟草盆煎茶指出候事

但長引候時は見計柑類物指出可申尤野外之應接には右之馳走に不及候事

一應接之節腰懸指出候様可致並に此方に而も腰懸に而應接可致腰懸之義は臨時之事故一脚床几之類に而不苦候事

一外國人腰懸に罷在候故煙草盆之類惣而臺に而指出可申臺之義は前株に類し候而不苦候事

一若又外國人御國內海邊に而場所を定交易致度旨申出候時は村浦役人共に而は益難相調筋故早々重役へ可申出旨相斷置急々御郡代出張先へ可申出候事

一家取建度候得は前株同斷相斷置急々御郡代出張先へ可申出候事

一開港交易願濟に無之外國之者參り候時は欠乏之品乞求次第指遣可申尤江戸政府に而條約濟不申事故早々退帆御座候様穩に可申聞候事

一万一徳島へ罷出度又は御隣國へ罷越度旨申出候得は急々御郡代御出張先へ可申出候事

一海部御陣屋見せ不申様に仕度事には候得共渠より一覽之義強而相願候時は一覽爲致不苦又右之最寄に相應之應接場無之時は御陣家御屋敷内等へ呼入及應接に不苦候事

一神社佛閣參詣仕度可申出參詣之義指支無之時は參詣爲致候事

但 御社又興源寺等は

國君並其臣下之外は難相成大法之趣申述斷之事

一下官之者共万一心不得又は醉狂等に而人家之鶏又雁鴨之類小銃に而打取候時は早々彼將官へ可

申達候右様之者は早速將官へ各申付候約束に候若又亂妨之様子に寄此方に而嚴敷召捕將官へ引

渡不苦事には候得共言語不通之國人聊之事を後患を引起可申も難計に付村浦之者共聊も各々

間敷義無之様致置早々御郡代出張先へ可申出候事

一外國人へ應對之義何事も實意に而申達聊も欺不申様可仕候水夫等之者毎時心得違不法之義有之

様子に相聞候得共水師提督始重たる文武之官人能事之道理合せも相弁居猥りに亂妨等之義は無

之事に付此方に而も侮り不申様精々實意を以應對可仕候事

以上

大地震實錄記

(板野郡國藏氏所藏)

于時嘉永七寅年十一月四日朝辰の下刻俄に地震ゆり出し何れも外へ走り出火の要心第一に取片付居申内所々建家相痛申由相聞へ申候彼是煙草四五服吞位之間震り申候尤同年六月十四日之夜九ツ半時に大地震にて何れも驚入其節の地震後にて承り候處伊勢之國四日市杯は祇園祭りに而火を扱大震りに而人家潰に火煽り大火に相成候由伊賀之國上野城下御家中町家一圓震り潰し其上御城藤堂和泉守様御本城震潰し同國にて凡百三十拾軒程の壹村亡處仕深二三間之池に相成候趣も承り候江州伊瀬之御城角樽震り潰し候趣越前福井御城家中市中不殘潰家に相成其上火煽り丸焼之趣地震に火の要心第一と申事何れも聞兼而得心仕其節大坂にて地震に出合候人より承り候は土地割除に疊を出し其上にて神佛を祈り夜明し致候儀直咄に傳り右に就萬端地震之心得御座候處同年寅の十一月四日朝辰刻大震り仕砌火の用心仕其夜跡にて二三度少々宛震り申に付何れも要心之こゝろ持にて居申所翌五日申刻誠に天地覆る様相覺其節夕飯の拵焚火を消し火鉢を外へ持出し召仕喜兵衛義は霄の地震を配り付置候馬を追出し巨燧我等内には前日か震候にて不仕候日の入合迄壹時程の大震り其節我等義は自性寺へ參り居合寺中一時に外庭へ走り出候處方丈之内襖障子震離仁玉門ぎいぐと震鳴凡壹間半位も家根にては震り申様に相見へ申候就夫釣鐘も棒に自然と震搗當り早鐘鳴

ごとくなり石塔もこごとく震動中々庭に居る事不能寺の西屋敷地へ垣を潜り出候處桶屋清藏居  
 宅震潰れ夫が火燭り烟り出申に付其方へ参り火取消し手傳仕夫が我家へ罷歸り候處先我家建物無  
 難に而御座候東隣り伊太郎西隣り吉右衛門前隣り角太郎近藤隆輔善八裏隣り藤藏油仕棟梁力藏中  
 堂妙般合四拾人程我等西の敷中へ皆々寄集り漸蒲團を被り神佛を祈る折柄申酉の方に當り山の崩  
 る音其中へ取交せ大筒のつゞけ鳴りし音相聞へ最此上は土地天倒仕義哉と消入心誠に今は生死  
 之境と胸を居の途方に暮皆々顔色なしになり大人子供に至迄泣々も眞言を唱居候内村内潰家出来  
 之趣承居申内徳島内町焼小松島焼西町築地西の方は空邊所々焼近村にも古川中喜來沖島善集寺出  
 火いたし其夜戌の刻に至り大震りに而敷の中竹に取付居候手引放ると様に相覺へ申候此事跡に而  
 不思議に被存候は竹が動は人居所も動く道理に存候得は是計不思議に被存候五日夜も貳拾度位も  
 震り馬を敷端に繋置夜九つ時に至り漸敷際に而粥を焚き給へ候得共中々咽に通りがたく然共寒中  
 に而冷入候 際に少々宛吞申候皆々敷中に而夜明し仕翌六日早朝に承り候は加々須野米津新田亦  
 は別宮邊土地一圓震裂土砂水を吹出し鯨の潮吹ごとく地毎に敷ヶ所出来白海の姿に相成り其上宵  
 の大震り後所々津波参り候由承り村内他村に至迄宮島金毘羅様御影に而津波のかれ候様言廣り参  
 詣の人々往來續き我等も則参詣仕道筋段々潰家御座候又は土地が砂水吹上げ候跡且一二尺が四五

尺迄の地割目喰違等も御座候竹須賀村中堤一丈も震り下り池へ吹出し埋り却て堤が池高く相成候  
 運に御座候金毘羅前堂回廊潰れ道筋土地高低相見へ申候六日朝己の刻に至り俄に金毘羅御園に津  
 波來ると申由にて三里空へ登る敷左もなくは此邊にては命保つ事いたし難由何れ共なく言出し廣  
 り村中始姪子野米津新田邊之人々我等門前を西へ泣々走る者もあり亦是春に年寄病人を負逃る者  
 もあり馬に乗り竹輿に乗り飯櫃を抱へ走る人もあり着類を持運人もあり子供を抱へ着替持候得共  
 逃往く邪魔に成捨て行く人もあり道筋に白毛綿端物着類等段々落し候所見及候雪駄を脱足袋にて  
 逃る者もあり馬の繋を切捨て追放し行く人もあり子供年寄生木に括付万一律波之難にて可死共骸  
 不動様仕居る者もあり狼狽周章逃る者つゞきけり誠今は一生懸命と誓の地震より戸棚箆外へ出  
 し置人も其儘欲捨明家として我先と逃走る我等敷の中なる人々一時に逃去り我家内種太郎母が抱  
 き孫太郎兩人へ小遺錢少々宛人別に相渡下女召連空邊さして逃候様申聞候得共孫太郎我等に別れ  
 おしみ一向逃不申無據我小家を油仕棟梁力藏へ頼置中島渡迄送り出候砌召仕喜兵衛義は馬に乗り  
 榎瀬村親元へ馳付親道藏家内船に而空逃行候折柄にて馬を榎瀬に繋き置き直様船に乗り逃参り候  
 我等義は中島惠勝寺門前にて承り候は中島渡船一人も渡し吳不申由承り就夫我等惠勝寺堀抜に而  
 垢離を取観音へ御園を入れ候處我村に止へしこの御園に而夫が家内召連我屋敷へ罷歸其節七八拾

人程右御廳に隨ひ歸る人有之候戻り候道筋繁き切離候馬喰合も御座候願々敷有様夫が我仮小家へ歸り敷に而六日の夜も夜明し仕矢張り時々少々宛震り申候其節津波除ヶ高一間半程の床を三疊拵年寄子供女分上ける積りに而大人は冬青樹へ登る積り仕置誠に大勢参り詰床拵に當感仕候當村内にも親は我等小屋へ歸り子供先行知れ不申子供戻る家もあり親の不戻家もあり離れくゝに而壹兩日はあはれ成る人々多く御座候其砌跡に而承り候處高房亦是古川貞方奥野下庄邊迄も追送りに逃候趣傳承り二三日も坂東檜山邊へ参り逗留仕候者も御座候我等召仕種太郎もりの娘娘瀬龜藏後家姉共三人檜山へ逃参り三日程間逗留仕候其跡に而諸方一統申儀は盜賊之申觸候様被申候人もあり亦是米津新田一圓川の如くに相成最一度大震り有之候時は土地滅亡仕様にも被存新田一統之者共中々居する事いたし難様奉存候是等之願き逃候儀は至極尤成義と奉存候夫に付添候逃人出來候方とも奉存候長原浦は川筋船に而浦中皆々逃候趣に御座候笹木野廣島も何れも大谷木津山へ逃去り候由霜月七日朝辰の刻大震に而潰家亦是端々に出來之由夫が築山之裏甬手に小屋を再懸直し候砌兎角日々夜々度々震り候時小屋が本宅へ用向に這入申儀おそろしく奉存候十四日大雨大風に而こゝろも少々相弛み小屋を離れ我家へ這入寢臥いたし候得共漸南座敷窓の下に家内上下一所に寢臥いたし其年は巨壁不仕着替を度々仕り並へ浮腰に而寢臥仕候十六日四ッ時が大雪凡雪降り之姿

へちま壹本わだきつむながし候位之大婦さ之雪降り聊之間に壹尺程積り申候誠に老人たりとも覺へ不申大雪大風是にも建家吹潰し申候天地之狂ひ恐怖仕候未だ日夜震り申候晝は世上へ氣も散り人之出入も有之夜は震數多く相覺へ申候霜月廿五日大雨にて地鳴り夥敷仕何れも亦々消入居申姿最早神佛に祈誓を懸け我等家内金毘羅へ七日之間氷りし朝はだし参り仕四拾日之間氏神日参仕五拾日の間金毘羅別宮八幡權龍鹿島明神並秋葉山愛宕山へ光明眞言慈教呪右八社へ御神号とも奉唱其跡にて大師觀音諸菩薩眞言日夜家内共打揃奉念誦候今以日々震り十二月十二日己の刻震り強く眼驚し心配仕候十二月十四日夜大雨降り中に夜子の刻大震にて何れも外へ出る計にて戸の口にて猶豫仕居申内震り止み我等家には下地疹等も無少ゆへ南座に寢臥仕候得共外方家により亦々小屋懸仕外にて寢臥仕家も出來いたし候十二月十六日夜大雪降りにて其中にも矢張り震り申候村中之内は地震怖人は十二月廿日頃迄外之小屋に寢臥仕候此節に至ても度々震り申に付此上大震仕節混雜無之様終末之配り申聞置候處寅の十二月大三十日朝五ッ時に大震り仕是にも潰家端々に有之由種太郎母か抱へ外へ罷出孫太郎下女並り皆々外へ飛出我等は神祭り仕折柄朝飯汁羹下女も走出居合不申に付直様釜の前におり火を消歎如何仕哉と被存候内甚震り強く相成り申に付無様水瓶之水釜の下へ流し込其儘外へ飛出申候其節召仕喜兵衛義は油懸取に参り居合不申に付夫が馬家へ



這入馬を追出し其節は震止み申候孰れ日々震りに而大底火杯を消事震りの大小運指別考消申に付馬追出事是非遅きはり申義に而大晦日俄に馬の仮小屋を懸け入置申而より一段氣安く相成申外方にも同斷仕家段々出來申候此大三十日震後四五日之間は中震り位之事四五度も御座候卯正月五日頃を巨燧仕候得共其片脇に要心水小桶に水を入置申候火鉢には土ひんを懸置是以要心水の心持に御座候卯正月二月共少々宛日々震り三四月に至而は一ヶ月の中に而拾度位も震り五月同斷六月頃は四五度に相成七月頃には大方震留り可申方八九月五六度震り兎角海之潮高く村添堤外島地に潮満込心配仕候卯九月十五日助任八幡祭禮場之筋へ潮満込かけ馬走る事出來不申様に相成申候

地震潰家大破有増仕候

大 松 村

一潰家拾貳軒 大破損八軒

但し中島境を五人突儀左衛門裏邊迄三拾ヶ所程地毎に裂目を土砂以上前の地藏角邊行詰邊五六ヶ所裂目の土砂吹上宮寺疹無少氏子檀家仕合に相成り我等方土藏壁破れ申候居宅別而之事も無御座候

中 島 浦

一潰家拾軒 大破七軒寺方丈潰れ申候觀音堂大破

但寺之前の大松境迄割目の土砂吹上走り水位の事に御座候北の手大手堤内の池へ震込下り申候其外堤に疹無御座候原金藏西池二つ御座候間之地五畝程麥地開田に震下り川向中島鴨ヶ淵の南麥地壹町七反程砂吹上大荒に而其上三尺程震下り開田に相成り其所外田等も少々宛下り申候北渡し場迄四尺程震り下申候様相覺へ時々潮満込申候

榎 瀬 村

一潰家九軒 大破拾貳軒 寺大破

但し摺籠御本社震潰れ九鬼土砂吹上壹貳尺の六七尺迄割目夥敷御座候眞に裂目長百間程之處段々御座候誠目當て怖敷難見様之事並南北原境新田环眞直なる田地の岸種菜植地に畦立置候地半間位も震斜後に而地持立合に而地盤姿に直申候何方も大狂ひ之所は同斷之事に候

加賀須野村

一潰家七軒 大破六軒

蛭子宮潰れ中用水の北へは土砂吹出下六衛邊は大荒に而土砂夥敷吹上川之如くに相成り跡に而砂取捨地毎に數百石出申候川筋は津波壹丈程參り申候由下吉衛築新田大荒白海之如く相成り何

れも五日震早々近村へ高候所へ逃申由往來渡場居地地震後下り月毎に大潮時には店々へ入潮仕  
大に迷惑仕候

竹須賀村

一潰家三軒 大破三軒

但兼子大松井利平石井り之間拾間程五尺程震り下り裂目一尺五寸程も御座候同中堤竹須賀番  
非人之東長廿間程堤一丈震下り北は平石用水南宮島用水一所に相成り申様に罷成り南手池へ堤  
震込堤の松杯は水中に相成り申候同堤東平石鈍屋之南長廿五間一丈程震下り南宮島用水へ震込  
池の道窪さ様相成申候

平石村

一潰家六軒 大破七軒

但蛭子野天王社總潰我等蛭子野控地少々宛土砂吹出申候小屋場松の木貳拾四五本土地震下り候  
哉亦は其年卯夏沖の潮高く候に付窪地懸水捌あしく候哉右松枯れ申候富久富吉新田杯は土地裂  
目多く御座候建家儘一二尺も震下り候所も御座候何れ荒々迄記置申候

宮島浦

一潰家二十八軒 大破二十軒 寶生寺方丈潰れ圓明院大破に相成候

但金毘羅別堂回廊潰れ浦中不殘御社へ寄集り申候由津波之節海中へ火の玉飛御靈驗速に拜仕候  
人有之由御西の丸

御隠居様御祈念被遊御祈禱別當り被仰付候に付夫より別而參詣人多く御座候誠に此時は何れも  
眞實也諸方諸着類杯小屋杯に置逃候得は紛失之家一向無御座候

鶴島浦

一潰家四軒 大破八軒 寶福寺方丈庫裏共潰家同斷に相成申候

但氏神荒神拜殿潰れ鶴島川向新田東土砂吹出元浦土地狂ひ無御座候

鈴江村

一潰家三軒 大破七軒

但村中土地堤等狂ひ無御座候

沖島村

一潰家拾軒 大破拾軒 善集寺庫裏座敷潰家其上燒失仕候毘沙門堂大破  
但鳥井開北土砂地毎に吹出川向西新田數百間裂凡一二尺六尺程割目出來仕其上土地一二尺位

も震下り卯年中始終潮入豆稻共皆無に相成申候別宮五反地間堤總而三尺程下り五反地を北原邊迄三四町砂に而麥一圓埋り海の如く相成申由沖島渡船の川津波の節□りに而通りし人御座候潮參り船等も扱ひ出來不申時もあり候川水一圓沼に相成申由尤土地下り候證據は堀抜之背三人程も地盤を土地離れ上り申運に御座候藍園井戸下を砂にて震埋り候類多分御座候

米津新田

但し新田中白海之如く相成り百姓不殘蜘蛛の子散ることく所々へ參り申候

長原浦

一潰家 大破五拾軒

但浦中一統船に而一時逃去り百八十軒之内坂本米藏並召仕男一人都合二人止り彌右衛門内所今も知らぬ産人にて家内無據止り候由與右衛門家七人の内二人熊野へ船に乗り參り残り五人の内四人迄子供右之仕合内義不得止事残り止り申由跡百七十七軒悉逃凡七八日之間總留主初て歸り候人は飯米調へに困入申由に御座候

我等母實家松村郡宇太郎地震大潰に付見舞參り道筋見及記

霜月廿一日宇太郎方へ見舞に參り候道筋中島渡し場一二尺を五六尺裂目出來仕長七八十間位之割

目夥敷御座候中村潰家三十軒北村三十軒程馬詰新田土地割目夥敷御座候北村往來東西土地を土砂吹上げ候跡多分御座候馬詰道筋潰家七八軒相見へ申候道筋外知れ不申宇太郎方建物三間に六間土藏壹ヶ所四間半八間之居宅二間半四間隠居家二間半四間店二間半四間納屋壹ヶ所棟數五ヶ所潰申候尤松村西在所高島村五十軒之一村三軒無難残り九潰れ相成申北方中之大疹に御座候松村十三軒程潰れ戻り道筋姫田村潰家無御座候大幸村十七軒潰家相當り長岸村氏神表邊土地を砂水吹上げ候跡多御座候一枚地に而一尺五六寸之高底相見へ申候中々當時田作は出來不申潰家十軒見當り中喜來浦土砂吹上潰家二十軒御座候由浦中用水堀惡水堀不殘震埋り一面田島一様に相成り水道無御座候向長岸新田大裂目御座候様相見へ申候廣島浦潰家六七軒相見へ申候新田裂目夥敷御座候新田を砂水吹上候由に御座候

一、鯛濱村百八十軒之一村七十五軒潰家出來仕候同村潰繁八茂吉五日大震りに而土砂震出し候に付無據馬切放し何れも逃候處野中に而馬刎合いたし裂目へ二疋之馬這入り埋り其後震ひしらずり右茂吉馬を堀上候節亦々震出し跡繁八馬其儘にして皆々歸り最早跡之馬生ながら埋り死したりと思ひ候處翌六日朝堀出しに參り候得は馬の襟を上出し顔計り相見へ眼をさろくご仕居申候に付人々右馬を堀出し候得は一向得動き不申如何成行候哉と困入候得其人々昇き歸り一兩日仕内如常

動き申候砂に而埋故血通ひ留り右様相成申運に御座候

一、新喜來村庄屋龜吉娘家内男折悪く留主に而居合不申處五日夕大地震に而馬を母親と兩人して追出に這入候處一向馬出かたく候に付木にて擲出し漸母親馬共無難に外へ出申候娘義は少しかくれ馬家潰れ打れ即死仕候

一、長原浦手習子師匠内室長原渡船にて男女四五人乗り渡海仕初津波にて難船仕男分は米津へ上り逃候右内室壹人流死仕右死體米津新田堤の下五日程其儘に御座候漸逃候人々歸り葬り候由に御座候

一、撫養岡崎村津波參り船に而二十人流死仕候潰家三步通御座候二通程は焼失仕候誠に大疹に御座候

右之通御國中諸所に至迄大疹空筋上郡邊新田地工砂吹上候運山分は山の崩れにおそれ夜分は狼狽地震におそれ徘徊仕申候由承記置事

一、徳島地震出火死人拾六人程御座候中にも裏家の子供三人走り出申處一人は漸町道へ出跡二人は子供追ひ家の崩れに關り留られ火難にて死一人逃延ひし子供を聞記す西町津川清次郎内室居室潰れ埋り候處地震後掘出し候處無難に罷在誠仕合成事此上なし

一、南方地震津波疼我等卯二月廿四日見分に罷出候處西由岐浦町際濱にて二丈三四尺位之津波海際堤切口にては五尺程も津波に堀れ二抱位之諸木根引に而抜流居申候潮行留り山詰にては四丈位之潮打込候跡諸木草等枯れ申候自然潮逸場なきゆへ潮高く相成申候運に相見へ申候流失之家跡總而石垣等迄も引荒し家跡之境坏も知れ兼不成分明然共折には雪隠小便所瓶一の残り所々に御座候流家之人々山の上に蕙又は板坏にて雨露凌兼候様之小屋相見へ申候

一、答島潮境土地下り亦は大手堤大破に而濱方へ貸銀主人迷惑仕尤境之儀は時々出來之鹽俵にもり懸け鹽方御役所様は是迄御取立銀主へ御渡し成候處右に而は跡勸農之儀は銀主へ被仰付候左候得は地盤之貸銀之處は年永く御取立被仰付候由に而迷惑仕候跡勸農銀指出不申候人は貸金捨り申候

一、那賀郡北中島村十一月六日津波來候様何れも被申村中一統野神社土地高き所に而寄集り□□に而何れも一時に髪を切野神へ捧け一生嚴命と奉祈念候我等方に前年奉公人に參り候者地震後に參り直咄しに承り誠にあはれ成事

那賀郡橋浦

一家數百五拾六軒

内二十二軒流失

同二十三軒潰家  
同百十一軒大破小破  
男壹人流死

同下福井村

一家數八拾八軒

內四軒流失  
同五十四軒大破小破  
同三十軒無難

海部郡西由岐村

一家數四拾軒

內十軒無難  
同三軒大破  
同二十七軒潰家

同郡西由岐浦

一家數貳百五軒

內三軒無難  
同百九十九軒流失  
同三軒潰家

男女拾六人流死

同郡阿部浦

一家數百六拾軒

內九十七軒無難  
同四軒潰家同斷  
同十六軒大破  
同四十七軒小破

但し伊佐利之儀は別而疹無御座候

同郡田井村

一家數四拾軒

內拾七軒無難  
同七軒流失  
同十六軒大破小破

同郡木岐浦

一家數二百三軒

內百九拾軒流失  
同六軒大破小破  
同七軒無なん

西牟岐浦

一家數百七十五軒

都而流失男  
二人流死

同 郡東牟岐浦

一家數三百五拾七軒

內三百五十四軒流失  
同二軒潮入  
男女廿三人流失  
男三人他國人同斷

牟岐之内中村

一家數百廿九軒

內三十六軒流失  
同九軒潰家  
同五軒同同斷  
同七十一軒潮入  
同八軒無難  
男壹人流死

同郡川長村

一家數四拾軒

內三十六軒流失  
同三軒潰家  
同一軒無難

同郡灘村

一家數六拾六軒

內二十九軒流失  
同三十七軒無難

同郡内妻村

一家數三拾六軒

內十三軒流失  
同二軒潰家  
同二十一軒無難

同郡日和佐村

一家數貳百七軒

內二軒潰家  
同三十軒同同斷  
同四十二軒潮入大破

同 郡出羽島浦

同二十軒小破  
同百十三軒無難

一家數六拾八軒

内三十一軒流失  
同二十五軒潰家  
同三軒無難

同 郡淺川浦

一家數貳百六拾軒

都而流失

但し寺三ヶ寺漸相残り候へ共大破

男壹人流死

新浦之儀は先無難少々潰家御座候由

同 郡獅子喰村

一家數五百軒

内三百軒流失  
同二十軒潰家  
同百八十軒大破小破

男七人流死

同 郡竹ヶ島

一家數四拾八軒

内三軒流失  
同三十五軒同同斷  
同十軒無難

但し大里之儀は大震り迄にて別而疹無御座候

(海部郡 池内總太郎氏所藏)

淺川浦取立書覺

由緒書先年大汐に流失仕承傳候趣有増祖父左之通書付

我等先祖父淺川浦取立申釣り書之覺

一元祖父渡邊五右衛門義は越前之國福井之城組罷候所に泰松入道らんと起し城上被落城主丸岡氏兄弟三人並我等四人連に而おられければ河洲北方定光村參候而休足仕内に兄弟之内弟壹人望者有之則其者に遣し三人連に而海部郡之内牟岐村はさ之坂與右衛門所に休足いたし又弟壹人宿與右衛門養子に遣し殘貳人參淺川内に鱒呂崎内磯浦と申所に家數千軒程の漁浦有之由に而貳人共彼

浦へ參休いたし候所に丸岡氏は漁場をきらい夫を海部郷中へ罷越我等義は磯浦に居申年寄役相勤候所大汐入大浪に浦之地徳打替し其土は四方原村入海之時に付不殘彼所押込則平地に成候得共石からに付田地に開者無之に付長谷川越前様を彼四方原を何者によらず開候は居屋敷七拾五歩永々迄無年貢に遣し其上壹尺八寸之こしの物を御ゆるしと高札御立て諸人は是を見て有付候得は家敷三拾三人此者共無役人に而近來村成候事

一磯浦庄屋平岡五郎右衛門同年寄渡邊五右衛門外地下人大工九兵衛一と九郎左衛門六郎右衛門作太夫上下五六軒ならて山に居不申候外人は方々へにけちり右浦之當地は廻り壹里のいけとなり其中に磯邊をるび入込申所を諸人申はるびか池と申ならはし今以るびか池と申事は也

一庄屋年寄相談之上山々に残りし者呼揃へ今之淺川へ立越參見申候得は一圓野原やふに而候處伐り開木屋かけをいたし夫々方々參覽のものとも呼あつめ少々浦成候時分に淺川村之内に福良と申海部に家敷貳三百軒之漁師居申に付庄屋年寄彼者共に申聞候は其所を漁場には此方宜と申呼よせ夫々浦に成申に付我等存候は何にとと浦取續之ためと存頭分百歩之魚御取來候得共少しにても漁師共に手當として我等義は取不申自分之はみを以御用相勤居申候浦人共も其れ成にいたし此方にも親よりのかくりと存無扶持に而數代之間御用相勤申候

一淺川村は本は福良夫々竹内夫から伊勢徳兵衛居屋敷本外は追々出來

いなは慶長冬もしんにいなはの居屋へ出祖父以來方々有付人皆了簡に而置

地方に關する稱呼解説

(徳島市 山内時行氏所藏)

一御取箇之儀もご御成箇御物成とも申候

一厘附と申は高に幾つ幾分幾厘と申す是を免付共免成共申候畢竟は高何割之取當ると申儀に而候

一石盛と申は田畑壹反之高付十五十六のと盛附御儀に而候此高付之盛を都合致候得は村高と申

候又上中下之田畑之反歩を寄せ高を附とば分米と申候左之通りに候

上田合何町何反何畝

此分米何程

中下合下々も同斷

上畑合何程

此分米

中下々畑も同斷

屋敷何程



此分米

右之分米を寄

高合何百石 是を村高と云

一惣而 物成後役と申は何年貢何役と申候而山林野原海川殺生等其外何にても田畑御年貢之外定納に米金納候儀に而候

一惣而運上と申は山林海川其外何に而も年々不足に請負人等有之候而納候米金之儀に而候

一年季賣之田畑を上方筋に而は本物返しと申候是は金子を貸し年季を定め賣地に致し利金無に年季明候時元金にて田地を請返し候を本物返しと申候

一口米口永と申は關東方にて御座候田方米壹石に米三斗畑方取個永壹貫文に口永三拾文宛古來方

御代官に被下來候上方は田畑共に米取故御取ケ米壹石に付米三升宛古來方御代官へ被下候處當

御代方相止め口米永 公義へ上納御代官へは諸入用を米金を以御代官高に應じ被下候

一質田地之儀金主之方へ田地を渡置候而金子を借金主之方に而若田地を小作に渡置候歟又直小作

と申候而地主に直に小作證文爲致候は直小作と申質地に而候

一出入田地之事金主之方へ田地を不請取證文に金子返濟若し滞候は、此田地相渡可申事と書口證

文は出入地と申質地には成不申候常体之借金と同事にて取上げ無し相對を以濟候様に申付候

一永錢之事永と申錢は無之候永と申は形有之ものに無之勘定相之名目に而永壹文を米壹石之積

金壹兩に積る事也

一地方に而三草と申は木綿紅花藍四木とは桑楮漆茶也

一畑方免之儀高は二毛三毛作と有之事に候故豊凶之儀左のみ無之ものに候先畑作之目當は麥を以

年々善惡を極候畑方之取け早損水損之大損毛有之時は各別無之候得は少々宛之勘弁に而免極候

一租を直にこきこなして干すして直に計る時は租壹升を五合摺に米に積る也租を干してこきこな

して計りては租壹升を六合摺にする定式也

一上田 中田 下田に而各三坪つゝ九段刈て目様に用ゆる事古法也

一質地證文に年季明不請戻候は、可致流地之文言有之分年季明早速訴出候時流地之旨申聞請戻候

儀申付間敷候

但期月前には前廣訴出候は、取上可申候

一山高之事

是は村中入相山有之山稼等致候に付山高を請本金並之年受を出事也

但此山高詰様之事古來御開合候處檢地之節反別改候事にても無之山稼其助成を見積り米にて取立候時は何石之年貢を出し可然と申處を見立其村之免合を以高に合申事也且又村に寄新檢を請古檢之高合不足候時は本高難成候に付桑山稼も有之候に付山高に請之高に合候様に致候類も有之候旨村へ申傳候由申也

一桑高之事

是は檢地入之節畑中に有之桑の木束直し見立三尺繩メにして壹束に付高三升到極候也或は同元短筋高貳升にも極候也又は桑之木大木は葉をこき遣ひ候事故是は右之桑束廻し准し見積る也尤株漬地は竿を除き事也併古來之檢地に漬地石除處もあり然れば貳重に年貢を出すよりは無理なれども今更改かたし

一楮高之事

是は右御檢に改壹束に付高五升到極候也或はつき短候得は三四升にも極候也尤畑中に有らば漬地可引也然共石除處も有

一麥増取之事

是は畑方之村用水懸りを見立畑方に仕立候時は畑方之年貢を取而は不足に付麥田を致候處は麥

田増取と名付上畑壹反に付何斗何升中畑壹反に付何斗何升下畑壹反に付何斗何升と致吟味有來年貢之外に増米を取候と云也是は私領坪に而有之事に而積成事也當時畑方之處田方に致候得は取箇之免を上田方相應之年貢を取立る事也畢竟麥田増取と申事也

一山年貢之事

是は山を控有之而米金共出し分を極置木柴取來るを言是によりて田畑御檢に山を賣買する也乍併村に寄惣百姓入會に仕來候處も有勿論年貢は惣割にする也

一山役之事

是は山年貢同様之意味也乍然最初木柴生茂りたる時は米金に而も不納して刈取事は難成村中惣百姓入會に仕來山役と名付米金上納するを言芝草切盡たる時は右之役免へき善なれ共小物成之部に入候時は年貢と唱ふるは其處に反別を分たるを云夫故年貢壹反に何程上とる也

一池役之事

是は池に而藻草を取り肥しにいたし役米金上納するを云

一池魚役之事

是は池に而魚獵いたし役銀上納するを云也

池運上之事

二四二八

是は池に而藻草を取魚獵いたし其池一圓に支配いたし運上銀上納するを云

一井料米之事

是は池村之地に而井堰をいたし用水取候時其村水いかり候に付其村之爲に不宜其上出水之節地面へ水湛候而難儀之筋有之候に付井料米出候也又は他村之地面高内は勿論高外之地に而も堀割用水通り候事も有之候様之類彌以井料米を遣事也依之高内之田地潰申様成分は公儀へ相伺御物成之内に而被下小分之金銀米は村並にする處も有

一水落の代米之事

是は惡水落の通を立候時他村之地を堀通不申候而不叶時は高内之田畑は勿論高外之野跡に而も相對之土地子之年貢を遣候大分之米高に候得は

公儀へ申上御物成之内に而被下候小分之儀は村並にもする也

一草代之事

是は草役米之類也又は他村之芝草を刈らせ代米上納爲致候類を云也

一葭代之事

是は野方濱方杯に而立毛仕付候而も水いかり作毛生立不申候場處葭植附壹反に付米何升取と相積り米上納する也高内之田地にても年々水損いたし御取箇も附不申場處は

公儀へ相伺葭植付可有之年貢を上納爲致候事も有又は川通之地面にて水押強處は水除之爲葭植立圍に致葭代上納するもあり但葭代は外物分宜數年貢付る事之水早損なき故也

一茶役之事

是は反別も無之又は山之林麓平地等に茶を植置銘々扣分明來様に高内之田畑地扣候様に役銀を出し申也村に寄村中入合之野方杯に茶を植付茶役を上納いたし他村之ものへも場處を切茶之木に而賣申處も有

一茶年貢之事

是は反別有之處に茶を植付置候歟又は畑中茶を植置檢地之節茶之木分竿を除候而茶年貢米金上いたし候に付高内同事之年貢を取候意味也

一鳥取役之事

是は里方にて有る也熟地水付之地候向も附申候に事役銀を出し居村之内鳥殺生致候事也

一見取米之事

二四二九

是は野方又は地低之地之埋立右之分手間入候は、作付生立可申趣に付御代官或は地頭へ相願定見取に年貢上納申事に候はば、場處取立申度旨願出候節場處吟味

一定見取之事

是は野方又は地低之地を埋立右之分手間候は、作付生立可申趣に付御代官或は地頭へ相願定見取に年貢上納申事に候は、場處取立申度旨願出候節場處吟味いたし物入之程を考見取米定候事也、不同之見取に致而は地面は是隨ひ段々見取米にも上げ又は高にも結び候様に成候故大分之物入之甲斐も無之候付定見取に上納いたし自分物入を以場處仕立る事也依而定見取は高之結候事也

一屋敷見取米之事

是は大川通堤外河原付寄候處大分之手間入築立屋敷にもいたし川稼等之勝手に能候故たこへ堤内に而屋敷構等之勝手に成候故御代官或は地頭へ相願屋敷見取定納に相極屋敷取立る事也惣而屋敷年貢は悪地に而も上畑に准し申もの故大分物入に而屋敷を仕立上畑之年貢を出候而は難義有之候故定見取に極る事也前條同斷也

一地不足之事

是は洪水之節水援等に而地面乏砂利又は砂坏大分走込候歟堤切入候而砂大分押込地面悪敷也古檢之石盛にて年貢上納難成候に付新檢を願出る時公義へ得下知檢地入候石盛一段二段三段も下け石盛附致事にて地なし高に成候故地不足と成也扱又は古來は人も少し田畑肥し耕作等も難成様成山方にては荒れ作にもいたし年貢並も立候に付隣郷山積之處坏は他村へ受取候を幸之様に致置候而畢竟追々年貢も出る故新檢地を相願檢地いたし候へは自ら元來之地に不足出來候様に成候類も有之百年経候而は不明にてケ様之類は難改事也且又一説に百年已前は山境持不分明成處多候故作付生立不申場處にても檢地之節細請いたし高に結び候様成族も有之畢竟作地は生立生立不申候に付追々願にて毛付之檢地を請地改いたし候故自ら地不足と成類も有勿論海成川成に成たるに其後檢地入候而元高に不足する類地不足也地不足にては色々譯有大概先此趣也

一地なし高之事

之は高三百石村高有之内作毛之外何成共村方か出んものを米に直して其米を高に結びたるを云然れは高はあれども地は無き故無地高といふ譬は

高三百石 内拾石 無地高

但 桑何拾束 壹束に付此代米何石

楮何拾束 壹束に付米何石

合米拾石桑高楮高

如此桑楮代を束に直して高に結びたるによりて高は有とも高之地は無を地無高と云也  
此外作毛之外物を代銀を積米相場に直して高に結びたるを云也

一永荒場之事

是は洪水之節堤切入小石砂利大分走込石及分場處にたどへ人夫を懸起返にても大分之物入仕當  
にも不剩元來之上ちを押拔其跡え石砂利走込候に付き人夫を懸起返候ても作付生立不申候に  
付永荒高引に相立申事也此外大沼大池葎場荒地小木杯生立兎角田地に不成を至極吟味之上永荒  
場と云也

一荒場之事

是は永荒場同様之事也乍去其村開闢之時又は新田開取致候節元來之荒場を土地も大概に土地  
を見候様檢地を請遣候作毛生立可申様に心付候而作付仕候得共肥し手間代杯とも實入不申候に  
付追々荒置候類を云

一荒地之事

是は荒場同様也然連共一旦田畑に取立作毛も仕付村高内之處地震等にてゆり込地面低成候に付  
致水損候歟又は流作之類にて出水之度毎上土押流追々地面衰へ手間代も無之自ら荒置類を云又  
は山崩或は川切入砂利等を置候故是を取除候事件々容易に不成故自然と荒置を云也

一池成之件

是は洪水之節堤切入池に成貳間三間五間之深さを云

一川成之事

是は洪水之節田畑悉押抜大川通に成候を云也又は洪水之節堤切入大川通之水は干上り切處分水  
押込田處之内川筋に成水留に不相成數日之内川筋に成候て水返し候に付水留致候ても川筋へ成  
候處は地低に成候故高内引に候を云且又堤切處深堤を内へ操込築申時は池を外之川筋へ出候も  
川成と云

一洲成之事

是は大川通水當強出水之節川欠等に成水うつ巻川底悉深成候て三間五間之洲と成を云

一川欠之事

是は川筋も同様也但大川端に有之田畑出水に追々欠込川に成と云

一山崩之事

是は大雨又は地震等に而山崩落河抜候而田畑之内石砂利にて埋り可起返様も無之程の處を云

一石砂入之事

是は谷川筋又は大川通にても山へ追々小石砂利押出申様成川筋出水之節堤切入田畑へ土砂大分押込石起返分引方を石砂入と名付る也

一石置引之事

是は山内之谷川通りは追々川瀬高へ罷成田畑は地低にて屋之棟川杯唱事數多有之候ヶ様之谷川處大石等押出類ものなり水之節圍ひの堤切入大石悉流落田畑共潰候を云又は大分の石入候て起返候而も石除場無之田地の内一處右持寄置たる場を高内引に致し候類石置と云也

一堤敷之事

是は出水にて堤切入水下深く成時は元の姿に築立候ては大分の物入懸り申に付堤を内へ廻し高内の田地を潰築立候事有之候又は堤はそく出水の節危候處内服付致候事にて敷地無之候ては丈夫に不成候故田畑を敷地にいたし普請する事也高内の田地を堤之敷に潰候を云也

一江桁敷之事

是は悪水仕又は用水溝之江端に水堤を築不申候ては出水之節左右之田地水押込候に付水除堤を築候を云江桁と云此敷地高内にて候得は江桁敷引と名付引事也

一溝敷之事

是は用水溝送通之内田地堀割申節は溝敷潰地引方立るを云

一溝代之事

是は用水引取候節他村之田畑又は野跡堀割水通申事有之年貢米出し不申候ては爲堀割爲堀割不申に付溝代年貢致し水引取也居村之高内堀割申節は溝代引と高を引候得共地主作徳米にはなれ難儀之筋有之に付其徳考村弁にて地主へ渡すも溝代と云且又他村へ遣候井料米程居村之高を引き遣類も溝代と云

一悪水吐之事

是は溜水深く成落兼作其水腐に成候敷又は城下杯之町居水いかり申様成時水吐能いたし候堀を立爲水仕申候悪水仕と云

一用水懸り之事

是は田地へ水引取候を云但天處之處は用水無之作毛生立申間敷事に候然ども用水懸候村は山寄

之所にて地低石地にて水之かわき強日々巻水懸不申候へは曾て生立不申事にて天水所は用水一切不懸候得共元來熟地之所故地底迄眞土或は沼地にて候故水持能十五日廿日之間照續候ても早損する事なし

一 神田之事

是は新田開發等之節爲成就氏神へ祈願を立田地付置檢地之節棹除にも可願處なれども末世に成候ては紛敷成候事も有之候に付檢地を請高内引に願事也又は大川通にて堤除之田地坏にがまご有之出水之節大分水吹出し堤之下は籠之こごくに成候様に見へ候處有之様に腹付等いたし防候而も人力に不及様に成行畢竟大灘之場所に可成趣に見へ候ヶ様之處は冷水強く吹出立毛實入不申年々當毛引に相立申事也ヶ様之場所私領に而は伊勢新田に差上其田地相應の初尾米上候事有之御料に成候而も其格を以有來通り神田引といたする事也

一 寺屋敷之事

是は私領方に而有之事也假は池川河原野跡等有之惣檀方寄合新田開發致し地頭之爲に成候事坏其内三分一五分一寺屋敷に被下候坏と相願新開いたし檢地を請寺屋敷三分高内引に致事有但高内引に致事不宜候得は由緒も無之寺に除地黒印等遣事は難成竿除に致置候ては却て己來如何様

之妨も可有之敷高内引に致する事也且又地頭由緒有之寺坏山林野跡地頭を買求寺之助成に付る事也野跡坏大分之金子を入新開いたし改出高に結び高内引に致置候類も有或は古跡同前之寺地有之候所檢地之時除にも願候得共除地にはひざと不成事故高内に致竿入候得共元々古跡之事なれば年貢付る事も如何故高内引にして寺屋敷引事もあり

一 伊勢屋敷引之事

是は伊勢御師以中廻候時逗留之爲に別家を立置事也敷地年貢米百姓並に殘置事也所に寄穴地を見立屋敷取に致置其已後檢地も入候節有之候へは其斷を立見捨坏に竿除に致置類も有又は檢地を請高内引に立る事も有依之伊勢屋敷引と申事也

一 土取跡引之事

是は堤普請之節高内之田畑土取堤築立申に付土取跡池に堀候故引方に立候を云

一 紙船役之事

是は紙漣御箱を船と云依之紙船役と名付る也商賣之品も多候内に紙船に役銀を取候事は酒株と同しくして猥に不成爲也惣而村方作外之稼家業何事にても仕出候事船役を付る事は公儀御徳用又は領主地頭之勝手に付る事にはあらず村方に作之外稼有之家業有之は村の爲に成事故其所作

は前方仕出たる時役を付る也當時中絶之時は其役をゆるし可申事なれども右の名目所に殘有は又日外に村の内にて拵出所之助成にも成事故其事失はせ間敷爲に役を爲出置事也

一 松林薪林年貢之事

是は他村に郷境不分明なる場所にて可及爭論所假松竹生立兼候ても年貢を出松竹を植る也且又百姓持林野跡杯に松竹植置生立も能候に付年貢を出すもあり

一 楮油荏役之事

是は山の麓又は野跡杯の土地の能所を見立楮木を植年貢を出す荏油は山に切畑焼畑杯を拵へ荏を蒔年貢を出すたとひ生立兼候ても少々宛也共役米上納候得は自分の扣地に成候百姓方願事也

一 鉄炮運上之事

是は畜類威鉄炮殺生筒兩様之運上を上る事也威鉄炮は畜類作毛を荒し申に付玉なし之鉄炮にて威申事也作方之爲威申事に候得は運上にも不及儀に候得共鉄炮獵に成申事故運上軽く上納爲致持主を極限に不成様にする事也依之運上銀村中より上納する也殺生筒は獵師方差上自分之勝手に成事故運上も多く上納する也

一 網役之事

是は濱邊又は大川通魚獵を致運上出ずを網役と云他村の濱邊川々にも一段之内向寄之處へは定有り有之魚獵する事也

一 夫金之事

是は私領に而有之事也村々水夫を出し遣候事古例にて高相應割懸夫を呼候事也然れ共夫にて呼候ては遣方之勝手懸敷事共有之百姓之勝手にも懸敷候故夫金夫米と名付出す事也御料召土地に成候而も如其例の取立之組夫米金相納候に付六尺給米は差免す例也

一 夫役之事

是は陣屋にて郷中高割を以水夫等を呼遣候事是等之類惣名夫役と云扱又城主にて城内普請等大外有之日用人足計にては大分之用懸り候に付領分夫役として高百石に何程人懸りと割合呼遣候事有普請場所之内何程は日用人足を以仕立ると評議を極め遣し候事

一 六尺給米之事

是は御料所に限り候名目也古來は國々高割を以人夫を役に出し二年三年つとも江戸へ御奉公に出し相詰るといふ傳有之候人夫を出候て百姓も難儀多候に付其代りを米にて出し致上納人夫を



不出候是を六尺給米といふよし懸り高は先年は御贈頭を負數御勘定奉行へ相違割合候所近年は高百石に貳斗つゝと極り則御帳にも外物に相記し候事に成たるなり

一坪蒔之正法順路之仕様は坪樹を刈候通り之坪續へ樹を打かへし當て一所にて貳坪刈て貳つに割て平均して壹坪の収を用る也

一収を直にこきこなして干すして直に計る時は収壹升を六合摺にする定式也

一上田中田下田にて各三坪つゝ九段刈て目様に用ゆる事古法也

一惣て坪刈を取箇之元に立て用ゆるは地方之功者之取箇は用て用ひざる事又檢見する引方を立る目こふしの目様年々豊凶を考候て坪刈は用ゆる事也取分古檢新檢地廣地詰り其村々作外之かせき山林海邊市場等此外品々之百姓之すきわひ能所を勘弁仕申考吟味を盡して取附極る事理屈取にならぬ様正理を以順路に困窮に及はぬ様に取附する事役人之肝要大切之事也

阿陽往古事秘録

阿波御國大元主將舊事

人皇三拾九世天智天皇御宇當主將

(三好郡來代備一氏所藏  
阿陽往古秘録中抄出)

人皇八世孝元天皇後胤武内大臣之玄孫

廣純阿波真人

但武内郷に人皇拾七代仁德天皇の七拾八年御壽三百六拾才にして神去り給ふ無二之聖徳之故  
後年高良大明神と奉尊号

人皇六拾世朱雀帝御宇

廣純拾貳代孫 阿波介則

天慶度中國之執事行直櫻間文治より拾代

阿波櫻間城主 阿波民部重能

同 成能

人皇八拾世高倉院八十一安德帝御宇

成能伯父 櫻間外記太夫瓦連

但壽永二年平大將宗盛と源將義仲同義經合戦起り平家敗軍讀攝阿州之海面に漂船す此時源九郎義經阿波國南方へ船揚而櫻間所々を責破り讃岐へ被越後傳内右衛門等義經の臣に被謀終に降參せり云々此砌阿讀豫佐四州之管領職は伊與の住人河野四郎道清也と云々然に壽永二年木曾源義仲平家責之砌道清義仲へ隨ひ忠勤を勵む依之木曾殿平家落下せし大功によつて朝日將軍に任隨ては河野道清に伊豫國を賜ふ也

養和元年平將軍三位通盛能登守平教經三万騎にて討入河野道清を亡し其子四郎道信漸落延ひ北條時政を頼居けりと云々其後元暦度長門國にて源平船軍之節大將は九郎義經陸將は和田義盛船三百余艘之先手の將は河野四郎通信也一方之大將は源範頼にて九州地に虎威を振て終に源氏得全勝之利

人皇八十九世龜山院御宇

三好郡之領主右馬頭平盛澄鎌倉之命に背き北條武藏守泰時より小笠原長房に命し被退治

人皇八拾貳代後鳥羽院御宇  
一院本院とも付稱

四州司 征夷大將軍源二位頼朝公御舍弟 五位上九郎大夫判官義經

但御兄弟御中不和に成將軍頼朝に判官殿を被爲殺とす依之伊豫守義經文治元年十月委曲を奉奏問御詮議之上藏人行家を四國之地頭とし義經を九國之地頭に可補之旨上郷左大臣經宗郷奏問に付仙洞叡慮被爲叶其趣勅命下りければ伊豫守義經備前守行家大悦不少御請奉申上

地頭殘 文治元年十月

源爲義之末男 備前守源行家

人皇九拾五代後醍醐帝御宇

承久亂之後也則阿波國守護並四州管領

小笠原右京大夫四位 源長清

二 同 彈正少弼侍從 源長經

三 同 同太郎右衛門佐阿波守源長房

但文永四年三好郡の主將右馬頭平盛澄鎌倉の命に背き執權武藏守北條泰時の爲下知と阿波守長房に賜ふ依之小笠原を改三好と子孫代繼先にあり

人皇九拾七代光明院御宇

阿讃豫佐四州管領職足利將軍より細川頼春を被居

建武以來

四國管領職 細川刑部大輔兼讃岐守源頼春

足利尊氏將軍代頼春管領を蒙り子孫長久

細川家代續左之通

二代目 源師氏 同氏春 同頼有 同頼元 同詮春 同勝元 同政之 同滿之 同義之  
同持常 同成之 同政之 同義言 同之持 同持澄

右之懸繁榮之所拾六世持澄に至り人皇百六代後奈良院御宇足利家拾貳代義晴公時代天文二十一年八月十九日三好郡之主將三好豊前守義賢に戦敗し阿波國板野郡勝瑞村於見性寺自害而南方之丈六寺に葬る其子眞之落延けり

但嫡男眞之は天正十一年十一月八日南方仁宇谷茨木の岡にして爲逆徒に自殺せり

二番小笠原氏代續左之通 則三好氏に改

阿波守長房子

三好筑前守行長 同元長 同長慶 同義賢 同攝津守冬長 十河讚岐守一存

三好左京大夫義治 三好彦次郎長治 十河孫六郎存保

但三好豊前守義賢は細川持澄を責打て板野郡勝瑞之城に住居し住吉村之神職を司る併前世之有徳行而哉四國並に攝浦河内和泉大和山城伊賀近江備前都合拾二ヶ國を領し入道而實休と号せり乍併其身は天命難逃永祿三年三月五日に泉州岸和田にて紀州廣瀬之住士島山高政と合戦之節終に爲流矢苦死せり

天正五年武將内大臣平信長田代細川家之軍將一の宮長門守於爲る勝瑞の大將三好彦次郎長治を討而先管領持澄之亡魂を被慰扱又翌年三好存保讚岐之十河より立歸り長治之跡を繼勝瑞之城を守る

所に天正八年一の宮成祐並七州の主將長曾我部之臣久武彦七郎合併而三好存保を責打存保敗北而再度十河へ逃下り同十四年孫六郎存保於豊後國討死せり

人皇百七代正親町院御宇武將織田秀信時代天正十年七州長曾我部元親阿州へ貳万余騎にて亂入し於中富川に三好存保を讚岐へ追退け其身有七州にて四國を打て管領を押領せり依之同十三年太閤秀吉公之命に背秀吉公憤給ひ一方大將軍には羽柴美濃守秀長從將には秀次軍將には明石飛騨守日根備中守或は氏家内膳正備前浮田堀長谷川其勢合三万余騎淡路之國へ打入りけり

一方の大將軍には蜂須賀彦右衛門尉正勝公同小六郎家政公從將には稻田宗心入道同修理佐其外軍士森西尾樋口を始而戰將拾貳人上下惣勢合三万余騎打入給ひ先一番に東條を責伏せ破竹のこごく進ければ大將長曾我部新右衛門親吉を敗北七州へ引行所美馬郡一字山にて小野寺備申守の子源六六郎三郎八藏安右衛門等人數を集め追打ければ親吉終に入藏か矢先に死し敗卒散々に本城差て逃歸りけり

阿波國平治し其功無類之思召にて太閤秀吉卿阿波之國を蜂須公へ賜る時は天正十三酉年依之其後國司蜂須公より小野寺之働御賞美之上右四人之者御高取に被仰付祖谷一字阿山七里に十三里の郷民心儘に可召仕旨被仰付源六は祖谷山に住居し源内と改大政所役被仰付唯今之重末名喜多源内之

先祖也

六郎三郎は一宇山に住居南入藏と改けり

右砌小高取に兩人始平家の敗臣曆家共佐野山城木屋平並南方にては青木七郎右衛門撫養に西條林

彌等文政度に至郷士に被仰付けり

慶長五年思召所被爲有而家政公國郡を豊臣家へ御進上被遊入道蓬庵と被爲号

然に石田三成於關ヶ原逆戦起し天下を亂し徳川神君より重々被爲招に付名將の御理解に被爲服御

子至鎮公徳川君へ被付仕之所無類御高名相重り其上從士之數輩智勇絶之倫士有之旁御感狀日本國

へ十二枚被爲下に九通迄蜂須賀公並智勇之將士へ被下置無比類御手柄也と世上感賞せりと云々

人皇百九代後水尾院御宇 慶長九辰年

二代大樹二位内大臣秀忠公御墨付を以阿淡二州御高二十五万六千八百三十餘石阿波守至鎮公へ

被下置依之松平之御稱号被爲免に付

從四位下行阿淡兩州太守松平阿波守公

御代續 家政公 至鎮公 忠英公 光澄公 綱道公 綱矩公 家員公 家英公 宗鎮公

至英公 重喜公 治照公 齊昌公 齊裕公

徳川公御感狀

慶長貳拾年也

稻田へも上御同年外五家へは慶長十九年也

羽林

治照公 文武兩道智仁勇殊御能筆馬御達人明和六年從四位侍從阿淡兩州太守任給ひ文化六年左

近少將に御昇進同十一年貞遷院殿 五十八

羽林

齊昌公三徳の大將也

大樹家治君御時代文化六年御歳十九歳大樹家齊君より彈正大弼に被任文政度奏御紋万字取交

免許金紋御先箱被許天保六年四位上に御昇進同十亥年正四位上彈正大弼左少將に御昇進安政

六未年峻凌院殿 六十五

御十五世宰相

齊裕公 三徳名將

大樹家齊君の二十二男松菊丸文政十亥年御養子に被爲入天保六年御乗出四位少將淡路守に被

補天保十四年齊昌公御内願通御西の丸へ御隠居齊裕公太守阿波守被爲任御嫡氏太郎様安政三

辰年御拾三才にて千松丸と奉稱 齊裕公天保六年少將にて御乗出嘉永六年中將にて被補安政四年正四位上と被爲成

依之正四位上羽林中將に御昇進被爲遊候

文久二戌年夏島浦三郎殿毛利大膳大夫殿山内少將土佐守殿御遊願にて京都へ御上洛帝都御守衛被遊に付追々十八國司不殘御本人或は御名代等上洛に付夫々寺院境内御借受其間に阿波様は烏丸御屋敷添に四條新地と申處御調添御普請被仰付候同三亥年御上洛御參内御父子様天盃御頂受被爲遊元治元子年太守公御參内宰相に御昇進被爲遊御恐悅事

東御殿より被爲入御姫君元治元年高司郷へ御婚姻並御城之嘉代姫様越前之福井へ御婚姻御拵最中也

蜂須賀千松君

御幼名氏太郎様安政六未年御拾四歳にて御歳三つ御加増九月十五日御乗出万延元申年九月御初入

文久元酉年八月千松様御事淡路守様御供は蜂須賀信太郎様山田貢様始御次三十二人御上下八十余人三好郡佐野村迄御成御歸は池田より御乗船にて御歸城其後江戸御參勤 同戊年京御上

洛御參内之御事

御山下市中

享保度に三十六町 夫れより御巡見毎に寛政度迄は御答に凡四十町程と申上處天保九年御巡見に左之通御答

市中町數合 四十五町

龜數合 五千六百余軒

内 千三百余軒 家持分

人頭合 二万二千二百余人 男女共

以上

小松島町數合 四町

龜合 八百六十軒

人頭合 三千四百人

阿波御城

根元渭の津と号一名渭山とも云々三好家之臣にて森飛彈守渭山に居其後天正度長曾我部之臣吉

田孫右衛門居天正十四年蜂須賀公從太閤阿波の國主に被補 家政公滑山寺島兩城を合被爲築一  
城となる此繩張太田常三と云々延寶六年より改而徳島と号但し寺島の城には元來福貞佐渡守居  
右同所之御押陣所

蜂須賀公長臣

稻田左馬介宗心

同嫡 修理介

但元和度淡州須本の城代へ被移

右同

牛田掃部尉 根又右衛門と号

三好郡池田城後中村右近太夫入交三世被相守

右同

中村次郎左衛門 後右近太夫

海部郡山下城後益田宮内入交只今小奉行三人御鉄炮二十四人

右同

山田八右衛門

那賀郡仁宇谷城寛永度滑津へ引取

右同長臣

細山帶刀 後加島主水と改

富岡城後滑津へ引取於今に御下屋敷あり

其外泊とも伊島とも云海邊 由岐 日和佐 大里 山下等に諸士御鐵炮之者在番せり

津田海御臺場

文久三亥年爲御築今年諸物大高直前代未聞事

川島古城跡御陣屋

文久三年御見分之上同四子年諸木植付石塔類取拂被仰付元治元子五月兵法調練場並瓢箪堀之

池井水共御出來

京都御守衛

文久三年より十八國司共江府御引拂御歸國元來京都烏丸に御屋敷一ヶ所猶又新地御調上御普

請被仰付候依之江戸七ヶ處之御屋敷には御番之衆中御指置諸國武術軍學出精下々迄相勵

。御國御家中御知行割 御藏米高

一高百石に付 現米三十六石 納舛

内六石は納夏十二石にて被下殘米三十石被下也

但頭入百姓は高百石に付二十五人宛被下候

江戸御參動始

三代將軍家光公御時代寛永十九年也

但大阪御陣は二十六年後にて瑞雲院殿家政公の御孫にて忠英公より始

江戸御屋敷

大名小路御上屋敷濱屋敷八丁堀三田鍛冶橋日比屋鰻澤

京都御屋敷

烏丸 此文久三亥御調上御屋敷四條新地に御普請

大坂御藏屋敷

但異國交易之事より御大小人氣御不和合に付薩長土三將文久二戌より帝都へ上洛依奏上

に十八大名都て上洛京都御守衛被遊候江戸在府之貴賤不殘昨亥年自國へ爲御引成候將亦

大樹公亥年御上洛あり當亥より元治元子年萬物一倍二相倍上り其内下直は米百七八十目赤

麥百二十目也魚鳥迄大に高直下民銀廻宜太平也古今不聞世柄也同年極月再度御上洛被遊候

阿波御國御番所

南に四十ヶ所 北方に三十七ヶ所

上方渡海 那賀郡 中島 福 橋

同川口御番所 勝浦郡 名東郡津田浦

同右同斷 板野郡 岡崎 北泊 粟津 別宮 今切

但淡州渡海也

讃州御境目御番所

板野郡大阪口 阿波郡日開谷 大影大奈良 美馬郡曾江口 三好郡瀧口 佐野 此所と讃岐境

土州境右同斷

海都郡穴喰浦 美馬郡祖谷山 有瀬 三好郡祖谷山 茂作名 但山城谷とも云々

右之外略之委曲は古城跡古事記にあり

別。土佐境大道 東より西へ巡々

穴喰峠の南 土佐の河内村

僧都の南 右同竹屋敷

船津谷の南 土佐の野根山

日浦峯南 右同藁瀬村

植木屋の南 土佐小石川

高川の南

右同大鋸木屋

瀧川高川の南 右同一の谷

右之分は東より西へ弓張成りに阿波つ國へたわみ候姿也是北西へ少しふりて麻植郡木屋平劍山之  
奥無増峠迄是より祖谷山

美馬郡菅生名の坤

同阿佐名の南

同有瀬名の南

土佐の久保村篠村

右同西岑村

右同岩原

池川千本の坤

土佐の別役村

石立山の坤

土佐の別府村

右無増峠より西へ順々左之通

三好郡山城谷下名の南

土佐の大砂子

上同上名へ粟山西俣筋迄土佐の奥太田村

。伊豫境

三好郡山城谷もじ名され名 與州の上山村 山城谷され名 佐野村峠 與州の下山村

。讃岐境 西筋より東へ順々

三好郡佐野村曼陀ヶ峯 佐野村雲邊寺越讃州海老教村 讃州粟井村 讃州河内村

同郡西山村 洲津村箸藏寺越 同郡晝間村越 太刀野山越 讃州財田村中の村 讃州山脇村

讃州摺入村

同郡加茂宮村 瀧口越 讃州勝浦村

美馬郡郡里村惣後越 讃州洲野村浅木村 郡里山越 讃州内海村

美馬郡大瀧越 讃州上安原村

同岩倉山越 讃州敷合村

同曾江山口 讃州奥山村

曾江山口 讃州中山村 横川村

阿波郡大影村 同國五名村



日開谷口 同國田面村

大奈良越 同國入野山村

板野郡宮河内村 同西山村

板野郡神谷村大山越 同伊川村 東山川牧村

板野郡吹田村大坂峠 同坂本村

是より東分北筋海邊御國分八ヶ浦あり 以上

○ 郡村立古事 聞書

竈 五十戸を以壹村とし 四ヶ庄を合して壹郡とすと云々

阿波御國も大古は四十六ヶ郷と承傳也

但左も可有之哉麻植郡も根元村數は川田忌部具禮島いかがしと合而四村の由其後 麻植塚 西

麻植 種野等其後に追々分庄成しものと承事夫に付先年より麻植山分道法五六里之所一村に而

種野村と号すと聞傳へ何様是より木屋平迄の中程を号中村山是より東を東山と唱且古人申傳

に惣元村は種野總産神は別枝と申傳ふ旁山分舊家へ咄合見れば三ッ木村古庄屋近來は無役人三

木善八方木屋平村古庄家郷小高取松家新右衛門小家松家勝右衛門方古寶物書記に有之中に舊記

二三枚宛に彌此山一枚一村にて總本名種野と申義實正也既に祖谷山は三十六名にて三里に七里と申又七里に十三里とも申山城谷は六十三名一字山は六十一名本は南方には似宇谷等其外大村所々に有之懸然は古格は本文實事可成所也

但國も人皇拾壹貳代御境究り又三十三世崇峻天皇御宇再境極六十四州二島と定る如し

○ 在々庄屋五人組行之事

太守公御治國之御砌

天正年中大政所 平政所 行き 御居

其後大政所は組頭庄屋 平政所は庄屋と御居替

寛文年中 五人組役 壹村に五人宛御居九庄屋二軒にて拾人

其後文化年行々役之者以來は 觸役と御居替

以上

參 考 目 録

我 杖 記 德 島 市 速 水 恒 吉 氏





阿波國田井庄中西郷之内轡轡師得錢最前御方參上者當知行不可有相違之狀如件

康曆二年十二月廿五日

阿波守 (花押)

國藤治郎允殿

御沙汰書

(美馬郡喜多源内氏所藏)

阿波國金丸庄並井川庄等事爲兵糧料所々被預置也任先例可令知行之狀如件

建德三年六月十三日

正氏 (花押)

祖山一族中

阿波國金丸庄井河庄稻用保等事爲兵糧料所預置也守先例可致沙汰狀如件

正平廿一年七月四日

政氏 (花押)

祖山一族中

去十六日至一宮進發候所各味方馳來候仍東條修理亮岡本九郎左衛門尉河村安藝守城へ加勢申候由候間陳寄候所退散候其方へ定可落行候討捕於忠節者共跡職事爲恩賞可申付候猶三好筑前守可申候謹言

谷俣尾尻山預ケ狀

(那賀郡湯淺高太郎氏所藏)

谷俣尾尻山下知之事

令志

右件之下地□禮儀おちかゑ候て沙汰行候間取上申候所に上使之御いけんにより候て本のごくごう山衛心にあすけ申所在地明白也但先例之ここく代々小いんこん分沙汰可申候若不沙汰候は、取上可申候此儀堅仍申本文書共に渡申實也仍爲後日預狀如件

康正三丁丑年十一月廿二日

木頭

忌部政□花押

番頭百姓訴申下知

(麻植郡三木宗治郎氏所藏)

(本文在別紙)

湯浦庭〔茶軒〕  
木 履

寶曆五年十一月廿二日

御氣對日爾時或行  
謝空四申木交書共二萬申實也  
嘗不新其地也一車土百申給也  
男小のいこい食新其百申給  
酒海飲御白由用決同之ころ  
ころころ山瀧心ころをり申  
新之勝のりいころり給了木の  
了新之新就開車土申就酒ころ  
存許之可飲□新給はさく及給

命志

谷野野山不賦之事

(新新高大禮丸酒類)  
源買酒

谷野野山不賦之事

(本文亦限焉)

(三木宗前禮丸酒類)  
源買酒

番題百枚補申不賦



谷野野山不賦之事



御沙汰書

(美馬郡  
徳善正一氏所藏)

(上の部)

(本文在別紙)

御沙汰書

(美馬郡  
喜多源内氏所藏)

(下の部)

(本文在別紙)

同上



(本文五限母)

(十の倍)

(喜達内丸浪瀬  
美濃郡)

晴野太書

(本文五限母)

(十の倍)

(勝善五一丸浪瀬  
美濃郡)

晴野太書

同  
上

坂東河原合戦感狀

(三好郡 佐野儀太郎氏所藏)

於坂東河原合戦之刻敵あ  
また討捕之特自身手柄之  
段神妙之至候猶敵陣無心  
元候爾可抽戦功之狀如件  
八月十九日 義 興(花押)

佐野次郎左衛門殿へ

長曾我部元親書狀

(勝浦郡 西野嘉右衛門氏所藏)

雖未申入候令啓達候貴國  
于今不昇平御心遣令察候  
自今以後別而可得御意候  
條於御入魂は可畏存候就  
中太西方三好安藝守和睦  
之儀此申申候殊被添御  
情由大慶至候重而使者差  
越申義 双方納得之御助  
言所仰候仍御太刀一腰馬  
一疋進覽之候聊表御祝儀  
計候猶委曲口上含候可得  
意候 恐惶謹言  
十一月廿三日

元親(花押)

人々御中



人々時中

示 慶(五册)

十一日廿三日

意請 恐對 露言  
 惟 謝 德 德 曲 口 上 合 對 百 皆  
 一 玉 嚴 聲 之 對 轉 美 時 隔 難  
 言 派 明 對 對 太 日 一 懸 混  
 歸 申 義 及 衣 釋 指 之 時 似  
 謝 由 大 獨 至 獨 重 而 謝 皆 美  
 之 謝 此 中 申 獨 謝 謝 謝 謝  
 中 太 西 式 三 被 謝 謝 守 時 難  
 謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝  
 自 今 以 謝 謝 而 何 皆 謝 謝 謝  
 于 今 不 昇 平 時 心 難 令 察 謝  
 畢 未 申 入 謝 令 謝 謝 謝 謝 謝

吳會莊臨元將書狀

(西禮嘉許帶門丸酒類)

謝禮大禮五帶門類

八月十日 慶 興(五册)

示 謝 禮 可 能 輝 既 之 輝 成 升  
 獨 轉 健 之 至 謝 謝 謝 謝 謝  
 主 式 結 謝 之 對 自 良 年 時 之  
 領 東 東 所 謝 合 謝 之 輝 謝 之

(謝禮大禮丸酒類)

進東西烈合輝謝狀



長島村御元祝書狀



坂東河原合戰感狀

卯月十九日

伊屋衆中

澄

元

(花押)

雖未申通一筆令啓候仍太西方事連々京都へ御味方致申候然者拙者罷下於富國既及合戰候所彼太西方于今無出陣結句色々難說候言語道斷之次第候若於事□候而者此時御忠節候者可然存候然ハ御敵之仁跡於跡驗者則御沙汰可遣候其外新御恩之事依御望可被仰付候急度御忠節可爲專一候猶委細三好筑前守可被申共恐々謹言

七月十八日

元

綱

(花押)

阿佐殿  
大枝殿  
今井殿  
御宿所

黑澤殿御領阿州上郡湯河御代官職事面々中江被預置訖仍太西口事彌相支可被抽忠節之由被仰出候也仍執達如件

長享元

十月廿八日

祖山奉公衆中

(花

押)

參考目錄

皆 藍方御役所地盤圖 全 德島市 長尾覺氏  
 全 砂場圖 全 河野芳太郎氏  
 海防策及其跋 全 曾我部道夫氏  
 魯西亞使節書翰御論御返翰寫 全  
 秋田藩銀小判 全  
 光隆公より拜領刀柄鮫 全  
 算法圖 全  
 量地指南後篇卷五 全  
 分度餘術下卷 全  
 紅毛流規矩元法圖解 全  
 高知藩十二文銀札 全  
 舊藩主御成の節御用膳 全  
 湯淺隆次氏

全御膳番用の御膳 全  
 筋矢の根 全  
 小弓 全  
 千段卷弓幹 全  
 大豆買上窺書寫 全  
 御門出入札 全  
 盤屋吉左衛門成立書 全  
 御麴上納桶 全  
 舊藩主姫君御食膳 全  
 右全杓子 全  
 右全盆 全  
 鐵全扇 全  
 鐵全助手 全  
 分銅全付鎖 全  
 全 佐香源一氏  
 全 高松虎太郎氏  
 全 久米龍藏氏  
 全 福田宇中氏

尺掛	御座	御船	全起	三島	左近	丁間	塗	雪	御家	全上	氷献	小
時計	船飛	船祭	起原	流系	國綱	衛用	雪笠	老へ	水室	上四	上の	高
	丸額	文	圖	槍身	作槍	いた	笠	水室	献上	脚唐	錫蓋	口
						らひ		覺書	櫃	櫃	物	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全

全	澤	全	全	全	天	高	竹	全	全	全	全	多	全
	禎	全	全	全	羽	島	内	全	全	全	全	田	忠
	三	全	全	全	政	一	吉	全	全	全	全	左	左
	郎	全	全	全	五	男	次	全	全	全	全	衛	衛
	氏	全	全	全	郎	氏	郎	全	全	全	全	門	門
		全	全	全	氏		氏	全	全	全	全	氏	氏

古	新	全	吉	眉	延	阿	阿	野	豐	蓬	軍	天	三
古	古	上	野	山	喜	陽	淡	太	公	庵	艦	正	好
錢	外	流	川	麓	式	實	名	刀	下	公	方	十	系
	金	航	土	し	神	實	勝	安	賜	下	名	八	圖
	銀	路	佐	る	社	記	記	刀	波	賜	面	年	
	銅	開	流	べ				行	平	槍	全	下	
	貨	鑿	材					安	行	槍	全	賜	
		書	件					刀	行	槍	全	兜	
		類							安	槍	全		
									刀		全		
											全		

久	久	全	德	全	全	全	鷺	全	伊	山	內	森	三
桑	桑	島	島	全	全	全	尾	全	勢	川	藤	甚	好
倍	晟	縣	縣	全	全	全	龜	全	藤	致	元	五	五
之	三	土	土	全	全	全	太	全	吉	知	藏	兵	郎
進	郎	木	木	全	全	全	郎	全	氏	氏	氏	衛	氏
氏	氏	課	課	全	全	全	氏	全	氏	氏	氏	氏	氏

豐	太	閣	書	全	伊	勢	藤	吉	氏
檢見役使用の算盤	由	來	書	全	山	内	時	行	氏
海陸御固場所付	皇	宋	通	全	武	藤	常	太	郎
律	令	要	錄	全	伊	澤	芳	一	氏
古	錢	錄	實	全	松	浦	嘉	次	郎
自寛政七年至全十三年日要錄	全	全	全	全	津	川	米	吉	氏
榎	本	家	系	全	谷	類	次	氏	
先	祖	傳	來	全	榎	本	儀	市	郎
武	林	翰	槍	全	全	全	全	全	全
文	書	卷	物	全	西	野	嘉	右	衛
諸	觸	書	寫	全	全	全	全	全	全
有	樂	齊	書	全	日	比	野	參	次
			狀	全	富	永	功	氏	

板	野	田	上	郡	古	籍	全	多	田	昌	正	氏
平	島	殿	覺	書	全	全	全	全	全	全	全	
三	好	記	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
公	裁	秘	錄	全	全	全	全	全	全	全	全	
小	笠	原	一	宮	系	圖	全	海	山	關	太	郎
三	好	時	代	城	主	紋	印	全	全	全	全	全
阿	波	國	城	跡	全	全	全	全	全	全	全	全
渾	天	儀	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
森	家	系	圖	全	全	全	全	全	全	全	全	全
富	豪	表	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
御	崎	本	社	再	建	寄	付	狀	全	全	全	全
中	村	姓	勤	功	系	圖	帳	全	井	村	芳	太
棚	橋	家	系	圖	全	全	全	全	全	全	全	全
清	安	藝	守	系	圖	全	全	全	全	全	全	全

村役人勤功の運取調	全	秋本嘉太郎氏
河野家系圖	全	河野國五郎氏
小林家系圖	全	小林甚平氏
地神宮棟札圖	全	澤田熊七氏
系	全	田中金次氏
太守御迎賀狀	全	湯淺高太郎氏
湯淺家傳來書	全	
應永三年書	全	
康正三年書	全	
年貢定書	全	
寶曆十二年書	全	
山田入右衛門書	全	仁義幾久氏
鏡	全	
鈴	全	

長防追討引拂及軍事固書寫	全	池内徳藏氏
天誅組の中罪滅處置書寫	全	池内龜太郎氏
船法三十一ヶ條	全	
廻船の定船法用事	全	
系圖の概略	全	
千光寺籍縁記載柱掛	全	千光寺
清岡道之助遺墨	全	生田龍太郎氏
武市家屬籍	名	武市昌香氏
神宮寺由緒に關る書	全	沼田・雜治氏
一宮家由來書	全	一宮成義氏
先祖舊記寫後編	全	犬伏倉藏氏
新朝裁許律	全	仁木幸太郎氏
異國船警衛御人數圖	全	森照夫氏
非常御觸寫	板	佐野次郎氏
原士根元成行覺書	阿	井上浪五郎氏

神佛御初穂其他勸化合力控帳	全	井	環氏
米鑑浦賀來航蜂須賀侯砲臺の圖	全	佐藤	永太郎氏
飯尾常房松永久秀消息懸物	麻	石原	六郎氏
飯尾之連短冊全常房短冊	全	全	
石原貞次郎畫像及自筆壁書	全	三木	宗次郎氏
番頭百姓訴申下知	全	河野	嘉太郎氏
河野家系圖	全	石原	六郎氏
安政七年航海中の信書	全	喜多	源内氏
御沙汰書	美	大野	協氏
御勅書並密奏書諸御書付拜寫	三	大西	貞平氏
稻田系圖	全	全	
大西家系圖	全	全	
大西覺養系圖	全	全	
神樂帳	全	全	
全圖	全	全	

大正五年七月五日印刷  
 大正五年七月十日發行

發行所 德島縣

印刷人 島正太郎

德島縣德島市富田浦町字  
 西富田千四百十六番地ノ一

印刷所 一新印刷部  
 德島縣德島市富田浦町字  
 西富田千三百廿四番地ノ一

IT 78 60

IT 78 60



終

